

いわて児童館テキスト Vol. 3

平成 19 年発行

監修

(財) 児童健全育成推進財団 野中賢治氏

取材協力

江刺児童センター

城西児童センター

仁王児童センター

真滝児童館

矢巾東児童館

湯本学童保育クラブ

製作

県立児童館いわて子どもの森

〒028-5134

岩手県一戸町奥中山字西田子1468-2

TEL:019-35-3888 FAX:0195-35-3889

いわて児童館 テキスト vol.3

子育て・子育て支援Q&A



豊かな子育て支援。
子どもと向き合う、
子どもの声を聞くために。

I 児童館の原点はどこに？ （I～III いわて子どもの森 吉成信夫）	
1) 昔、私達が子どもだった頃原風景	3
2) 遊び場の条件	4
II これからの児童館に求められるもの	
1) 児童館を取り巻く状況	5
2) マーケティング手法とは	5
3) サービスと顧客第一主義	8
4) 子どもファースト、すべては子どもたちのために	8
III 今、児童館スタッフとして全員で共有すべきこと	
○いわて子どもの森 10 則	9
IV 子育て・子育て支援 Q & A	13
Q1. 子ども同士のけんかに対応する？	14
Q2. 友達をたたき、大人にも乱暴する子に対応する？	16
Q3. 子ども達の「うそ」や「盗み」にどう向き合う？ （奥州市水沢青少年育成市民会議 主任事務局員 大村千恵）	18
Q4. 忙しすぎる子ども達にどう接する？（時間が取れない、関係が作れない）	21
Q5. 言葉遣いの悪さについて	23
Q6. いじめにどう対応したらよいですか	24
～コラム①：NGO 盛岡・マニラ育英会 代表理事 村田知己～	26
Q7. 「発達障がい」がある子どもたちと関わる上で、気にかけておくことはありますか （カナンの園ヒソブ工房 施設長 佐藤真名）	28
Q8. 宿題どうする？	31
Q9. 地域の資源をどう活用する？	33
～コラム②～	34
Q10. 先生、学校とどう連携する？	36
Q11. 親御さんとのコミュニケーションを円滑にするには？親御さんの要求をどう受け止める？	37
Q12. 長期休みなど児童館・学童保育で過ごす時間が長いときに、遊びのプログラムや行事などで工夫していることはありますか？	39
～コラム③～	41
Q13. 遊びが続かない子（ルールを変える、遊びが膨らまない）について （岩手県立大学社会福祉学部 准教授 山本克彦）	43
Q14. 後片付けをやらずに帰る子どもへの対応はどうしていますか？	46
Q15. 子どもさんの支援に困った時、誰か（どこか）相談できる場所はありますか？ それは誰（どこ）ですか？	49
～コラム④ あそび ma・senka 代表 西里真澄～	50
V 今、職員に求められるもの （吉成信夫）	
1) 心とからだの防波堤に	52
2) 見守ること、見張ることの違い	52
3) 子ども話を聞くことの大切さ	53
VI 困ったときの連絡先リスト	54
あとがき	58

I. 児童館の原点はどこに？

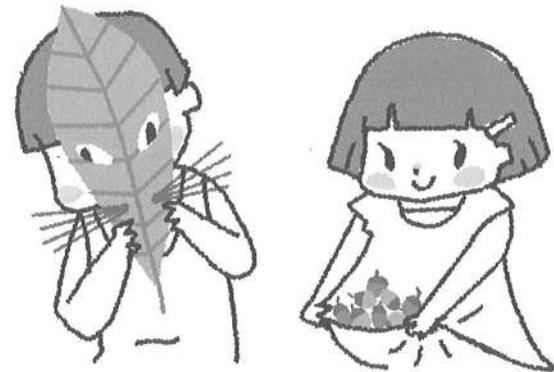


1) 昔、私達が子どもだった頃原風景

子どもだった頃とはいつのことまでを言うのでしょうか。今も子どもだ？というひともいるかもしれませんね。あらためて言うまでもなく、私たちはもう子どもではなく社会的責任をもつ大人です。しかし、児童館で働くスタッフとしてはそれだけでは何か足りないように私には思えるのです。ひとによっては、専門性とか学問的バックボーンによって子どもに対してという側面もあると思います。でも私には、児童館のスタッフは、子どもの頃遊んだ記憶のリアリティを頼りに、皮膚感覚のような感性に近いところで子どもと日々ともに在ろうとする仕事をしているような気がしてならないのです。私たちは、日々、自分の中の「子ども性」を唯一の手がかりとして子どもと対しているのだと。

子どもの頃って、あなたはどんな遊びをしていましたか？

野山をかけめぐっていた。原っぱの土管に入って漫画を読んでいた。駄菓子やさんで買い食いするのが楽しかった。川で（海で）一日遊んでいた。秘密基地を作ってその中で遊んでいた。神社の境内やひとの家の塀の上だって遊び場だった…とか。思い出せばいくらでも思い出すことができるはずです。そう、私たちの暮らしの周りには、すべて遊び場＝ワンダーランドだったのです。遊び道具やゲーム機なんかなくても、遊びは自分たちで自由に、自発的に、「創造」することができたのです。



2) 遊び場の条件

では、そういう遊び場を成立させている条件とは?どんなものなのでしょうか、というグループワークを学生たちとやってみたことがあります。もちろんグループによって違うところもあるのですが、ほぼ似通った指摘がなされました。それらをまとめてみると、

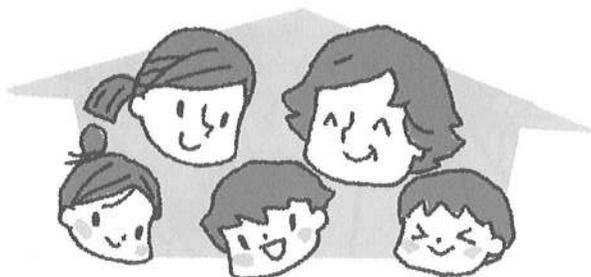
1. 近くにおとながいないこと(おとなの視線から隠れられる)
2. 自分の家の近くであること(歩いて行ける)
3. 遊べる友だちがいること
4. 自分で遊びを選択できること(やらされることではない)
5. 自然があること(ちょっと危険なところもあること)
6. 大声を出してもいいこと

といったところでしょうか。

これは、別の言葉で言えば、子ども自身が心とからだを解放できる場所(遊び場)が、生活圏の中にあったことを表しているのだと私は思います。私たちは無意識のうちに、遊びを通して、ケンカや仲直りの仕方、社会に出て行くためのありとあらゆるコミュニケーションの取り方をここでまなんでいたのです。

今の子どもたちの周りにこのような遊び場があるのでしょうか。学校の校庭や公園を除いて、子どもたちの遊ぶ姿がめっきり減ってしまいました。遊び場の存在は、空間としての価値だけではありません。心とからだの抑圧をほぐすためのかけがえのない場所でもあったのです。子どもの心とからだの発達という観点から見れば、児童館は、実は私たちが子どもの頃に存在していた遊び場の持つ機能を代替する場所であると私は考えています。

児童館職員は子どもたちから見て、安心できる存在として、手助けや相談にのってほしいと子どもたちがそのことを求めることができる存在になることが求められています。



児童館=子どもの心とからだの抑圧を解き放つ場所

II. これからの児童館に求められるもの



では、児童館は、どのような考え方で運営していけばいいのでしょうか。個人の責任感だけではいい児童館は作れません。あの児童厚生員は本当によくがんばるひとだねえと周囲から評価されたとしても、それは個人のモラルや資質に帰するものである以上、そのひとが他へ異動してしまえばその評価も組織の留まることなく消えてしまうものなのです。だからこそ、個々の児童館らしさがどこにあるのかということスタッフ全員が共有しておく必要があるのです。

1) 児童館を取り巻く状況

児童館は地域の中の児童健全育成に関わる拠点施設として、戦後長い間、重要な役割を果たしてきました。一方、外部からの厳しい評価にさらされることもなく、現場での子どもとの対応や提供するサービスの質の如何を問われることがあまりなかったのも事実です。

しかし今や、地域の中で、健全育成に関わる施設は児童館だけではなくなりました。文部科学省が推進する放課後子ども教室、公民館や図書館、ミュージアムの子ども〇〇教室、民間企業の経営する遊び塾など、子どもに関わる事業に多くの方面から乗り出しています。言い方を換えれば、擬似児童館的な施設が増えてきたともいえるのです。その中で、児童館は他とどこが違うのか。これを利用者に明快に説明し、理解と共感を得る必要が出てきたのです。昨年からは指定管理者制度への移行とともに、NPOや民間企業に対して児童館経営の門戸が開かれ始めたこともあって、それぞれの児童館らしさが問われるサバイバル時代に入ったのだと思います。

2) マーケティング手法とは

マーケティングという言葉が皆さんは聞いたことがあるでしょうか。企業の専売特許のような言葉ですが、商品やサービスをどうすれば消費者が買ってくれるかをよく考えて、他社と差別化できるポイントを探してそれをメッセージする、一連のコミュニケーション活動のプロセスのことをマーケティングと言います。でも、児童福祉の世界と商売は違うんじゃないかと思われるかもしれませんが、もう少し説明を加えてみたいと思います。

確かに児童館を利用する子どもたちや親の方々を顧客と呼ぶにはかなり抵抗があ

るかもしれません。利用者とはここでは呼んでみます。どのようなサービスを提供すれば利用者のニーズ（期待）を満たせるのか。それを考え、実行するのがマーケティングです。つまり、利用者が望んでいることをいち早く察知して、それに柔軟に応えるかたちに児童館のサービスの質を向上させていくわけです。

モノを売る商売とはもちろん違いますが、利用する子どももおとなも児童館を好きになってほしい。愛してほしい。継続的な信頼関係を利用者との間に築きたい。そういう良好な関係性を利用者や地域住民、学校等と結べれば、児童館の安定的な基盤は確立するのです。そのためにはマーケティングという考え方が有効なのです。

①目標（ゴール）を設定する

時間が有限なものである以上、何事にも始まりも終わりもあります。何をを目指すのか。どういう児童館でありたいのか、どうなりたいのか、という目標（ゴール）を具体的に創ることからすべてが始まります。年間活動予定はあっても、その先の到達点を示す目標を言語化できている児童館は少ないかもしれません。でもこの目標を明示することはそこで働く職員にとってもとても大切なこと。職員の間での共有化が図られていけば、日常業務の意思疎通がぐんと円滑になるのです。実際私の児童館では、職員だけでなく、ボランティア、清掃さんや警備員さんに至るまで同様の考え方を理解していただいて日々の仕事に取り組んでもらっています。

※子どもの森の例

〈みんなで目指すべきゴール〉

誕生したのは昨年なので最後発だけれど、最後発だからこそ最前線に立つ全国一ユニークな大型児童館と呼ばれたい。

（他の施設がやれない、やらないことにこだわりたい。提供したい）

なにがユニークなのか？（と呼ばれたいのか）

○職員それぞれがそれぞれのやり方で、サービスの受け手である子どもたちの心からの満足を考えながら、暖かいムードを醸している。（こんな公共施設どこにもない）

○声高ではない、いつ来てもさりげない場所。障害があってもなくても、構えず、さりげない気配りがなされている。（かたちでないユニバーサルデザイン）

○健全育成の観点から、子どもに関わることを専門としているおとなを対象として、研修プログラムを開発し、導入している。（ひとつづくりに真剣に関わろう）

○すべての提供すべきプログラムの原点には、「からだ」で感じて、「からだ」で気づく、遊びを通して子どもたちの無意識の部分に耕す考え方を据えている。

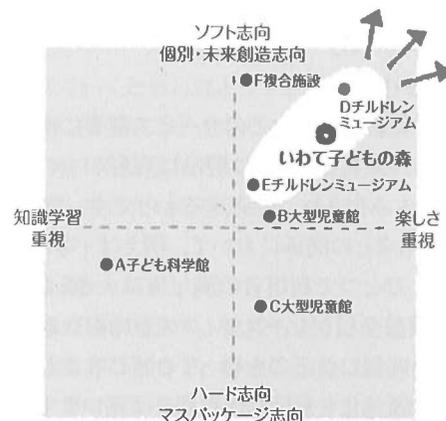
（脱学校、脱教室、脱効率。その象徴がのんびり、ゆっくり、ぼけー）

②ポジショニングとターゲティング

マーケティングの中で、一番大切なポイントとなるのがこの二つの言葉です。利用者の心の中に児童館のイメージを明確に位置づけるためには、他の子どもに関わる施設や事業とを比較して、自分たちの児童館がどこに位置するかを考えてみるとよくわかります。日常の中では毎日が子どもたちとの対応で精一杯で比較なんてしたことないかもしれません。でも、そこで冷静に位置づけてみると自分の児童館の進むべき方向性が浮かんでくるから不思議です。

位置づけができれば、今度は児童館を利用して欲しい利用者をさらに具体的に想定してみます。現状では、主たる利用者は誰なのか。サブ的な利用者は誰なのか。さらに開拓すべき利用者層はどこなのかを明確にしていくわけです。

※子どもの森の例



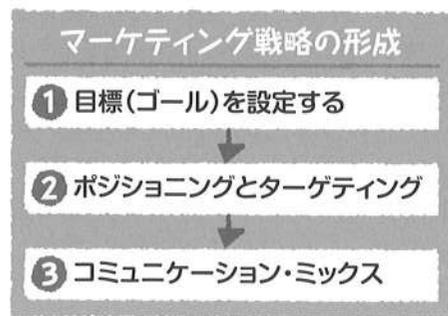
子どもの森のポジショニング

全国を視野に入れた競合比較をすることで、大型児童館のジャンルにある子どもの森の方向性を明示するために作ったものです。（X軸Y軸にどのような切り口を持つてくるかがポイントです）

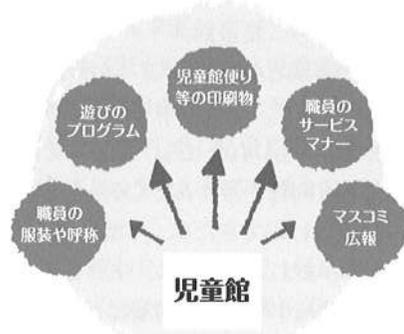
③コミュニケーション・ミックス

到達すべき目標、ポジショニングとターゲットが描けたら、利用者にとって効果的なコミュニケーションを働きかけることができるかを考えてみましょう。児童館ならではのメッセージを、利用者を取り巻く様々な環境に積極的に働きかけていくことを、コ

コミュニケーション・ミックスと言います。例えば、児童館の定期的なお知らせ、職員の服装やお互いの呼称、サービス対応の姿勢、遊びのプログラム編成、マスコミ広報、に至るまですべてに及びます。



①②③を総称してマーケティング戦略と呼びます。



さまざまなかたちで児童館のメッセージは発信されていく。

3) サービスと顧客第一主義

よく企業、とりわけ百貨店や旅行などのサービス産業に関わる話の中でこの言葉を聞いたことがあると思います。ここでは製品は有形のものではなく、顧客との関係性を通じて価値として生み出され、存在するものです。では、児童館の場合はどうでしょう。やはり、利用者との関係において、例えば「電話での対応の仕方」「来館者への声がけの仕方」ひとつで利用者の満足度は大きく変わります。

だからこそ、児童館職員全員がマーケティング志向を持たなければならないのです。金太郎アメと同様に、どこを切っても同じ考え方に貫かれていなければならないのです。これは画一化を意図した管理とは違います。子どもファースト、まず主たる利用者である子どもたちを優先したサービスをしているか。子どもたちの声を低い目線で聴き取る努力がなされているか、といった館の姿勢の柔軟さが問われるのだということです。

4) 子どもファースト すべては子どもたちのために

何のための、誰のためのマーケティングなのか。私たち児童館に関わるものが肝に銘じておかなければならないのはこの一点に尽きます。児童館を利用する、もしくは利用する可能性を持つ子どもたち、親、さらには子育てに関わるすべての人々の数を増加させ、かつ利用者満足度を高めるためのマーケティングです。利用者ニーズに応える不断の努力が、結果として私たち児童館職員のサービスの質の向上をも

たらしてくれるのです。

冒頭に述べたように、児童館は生き残りを賭けて他の類似施設との「差別化」(他施設と異なる独自ポイント)を明確なものにしていかなければなりません。歴史的に言っても、経験ノウハウ的に言っても、子どもたちの健やかな成長を見守りながら、子どもたちの心とからだをいきいきとひらいていく地域の総合的センター＝子どもの居場所は、児童館こそが担うべきだと私は考えています。児童館が、さらなる時代の要請に応えられるかどうか、その鍵は、マーケティング戦略の立案にあると言っても過言ではないのです。

Ⅲ. 今、児童館スタッフとして全員で共有すべきこと



児童館の利用者の視点やニーズを起点にして、私たちが提供しているサービスのひとつひとつを向上させていくためにはどうすればよいのでしょうか。

子どもの森の場合、開館2年目に「子どもの森10則」という行動指針をまとめました(派遣会社、警備会社、清掃会社等に所属するスタッフも含めて全員を対象)。これをひとつの例に説明してみたいと思います。

いわて子どもの森 10則

1. 朝の第一声から仕事が始まります。気持ちよく、元気に入ってこよう。

(自分の気持ちの持ち方ひとつで、ひとの印象は大きく変わります)

まず、いつでも、どこでも、見られている自分を意識するようにしようという意味です。館のスタッフルームの出口の内側には鏡が貼ってあるのですが、これは朝、活動が始まる前に自分の顔を鏡で見てから子どもたちの前に立つことを習慣にするために生まれたものです。

2. しぜんに生まれる私たちの笑顔が子どもの森の原点です。

(つくり笑顔ではなく、自分の内側から湧いてくるもの)

コンビニの店員がいくら笑顔で明るく言葉を発しても、相手の目を見ないで空で言っていることがよくあります。これでは気持ちは利用者には伝わるわけがない。だから私たちは子どもの目を見て相手に言葉を届けるようにしようよ、ということです。

3. 意識して自分が思うよりも一歩前に。お客様に近い距離で対応しよう。

受け答えは、大きく、明るく、ていねいに。想像以上に声は人をあらわします。

(電話対応、受付対応、遊具対応、ぜんぶ)

学校に電話しても電話に出た先生が名乗らないのでちょっと不安になった、声の感じも暗かったのですますます不安になった、なんてことはありませんか。電話を受け取るときに、私たちは必ずはい、〇〇〇児童館の△△です。」と名前を名乗ります。こんな小さなことが電話の相手に安心感を与えることにつながると思うからです。

4. すべてのサービスの受け手は、こどもたちであることを忘れずに。

(おとなではない。肩書きではない。理屈ではない。)

子どももおとなも同じに大切に対応します。受付はホテルで言えばフロントですので、子どもたちの目線で対応を。

5. わかったつもりでも、念には念を。コミュニケーションは密に取り合おう。

(何度でも繰り返し、直接、当事者同士でことばで確認を。文字でのメモも)

シフト勤務ですれ違う職員に日誌の存在が重要な情報ツールになっています。その日の課題や来客、クレームなどはできるだけ詳しく記入します。

6. ここは変わり続けていくミュージアムです。私たちのまなびや成長がなければ館の成長もあり得ません。

そのために全スタッフ研修があり、日々個々の研鑽があると位置づけています。自己の専門性とキャリアを高めることを何にましても大事にしてほしいという願いを込めて。

7. 失敗は成功のもと。完璧を求めず、失敗の中から小さな成功を積み上げていこう。

(頭ではわかっているつもりでも、意外にかたちに縛られているものです)

若手スタッフがよく陥るのはこのところ。失敗したことがないから恐れて思い切ったことができないというひとが多いように思います。意欲的な失敗は児童厚生員の勲章にしてほしいのです。

8. 子どもの森は「健全育成」を通して、「子どもたちの生きる力」を育む児童館です。

すべてのプログラムにはそのための意図や狙いがあります。そこが遊園地との根本的な違いだと心してください。

私たちの仕事は単なる遊ばせ屋ではありません。遊びは子どもたちの心とからだの抑圧を減じるための方法であり、ツールであるということを常に自覚してほしいのです。そうでなければ自分のプライドは生まれません。

9. ユニフォームを着たら、派遣も、ボランティアも、警備やお掃除の仕事も、レストランの仕事も、みんな同じ子どもの森のサービス・スタッフとして見られています。全員で支えあっています。

私が一番大切にしているのがここです。子どもの森の人気 No. 1 は意外にも警備員さんです。お掃除さんも好感度抜群 (デイズニーランドのキャストに負けていません!)。みんなで同じ気持ちで支えあう気持ちを持てるかどうか常に日々の勝負どころです。

10. 常に、どんな時でも好奇心を忘れないこと。あきらめないこと。これがすべてです。結果はあとからついてきます。

個々のスタッフのモチベーションを上げるのは、自分の好奇心がいつでもどこでも自在に動く身体と心を常に用意して置けるかどうかということ。

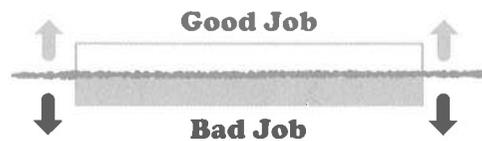
以上に述べたのは、児童館全スタッフの行動規範 (ビヘイビア) についてです。10 則だけでは絵に描いた餅ですので、これを基に子どもの森では、毎日、朝礼夕礼を活用して、日々の確認を行うようにしています。

朝礼と夕礼へのこだわり

朝礼では、今日全員で共通に理解しておかなければならないことのポイントを話します。子どもと関わる児童厚生員の身体がこわばっていたり固まったままでは、子どもたちと良好な関係を築くことはできません。心とからだのリラクセーションのために、ほぼ年間を通して毎日、朝礼の中で、簡単なストレッチ体操を入れたり、全員で歌を歌ったりしてから、仕事に入ります。顔色を見てスタッフの体調や感情のテンションのチェックをするのが館長である私の重要な仕事になっています。そして、夕礼時になると、事務室に引き上げてきたスタッフとその日起きた問題やクレーム、破損箇所、怪我等についての確認と情報共有をします。

グッドジョブ、バッドジョブは、一枚のコインの裏表を成していて、状況によって変化します。サービス業の難しさはまさに、ここにこそあるということを私自身、強く思います。

サービスはコインの裏表



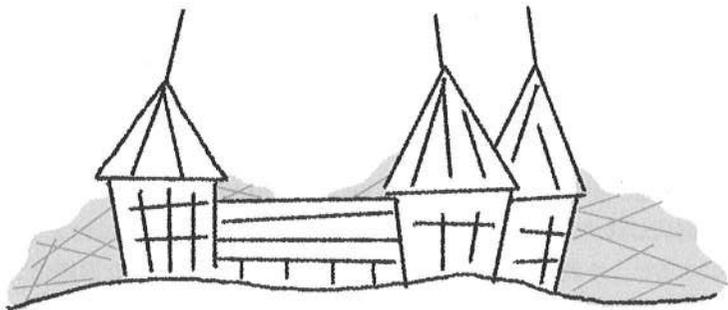
あやういバランスの中で私たちのサービスは成立する。
だから毎日楽しい。
だから、毎日にやりがいがある。

多くの児童館の場合、勤務シフトの関係から全員が揃うことは不可能ですので、日誌の内容記述をいかに利用者サービスの観点からするかも重要となります。

スタッフの意識

どうしたら児童館で働く人々すべてのふるまいや意識を向上させることができるか。これはマネジメント上の最も重要な課題だと思います。児童館が何を指すのかを明示することができても、肝心の職員、スタッフが目標を共有するための個々の気づきを誘発しやすいしつけやシステムづくりがなければそれぞれの職員の行動を変えることはできません。職員から率直かつ本質的な問題や課題が出てきた時こそが変革のチャンスなのです。何が良くて、何がまずいかを判断するためのサービスの基本的な考え方をみんなで再確認し共有化することを徹底する習慣をつけたいものです。

(「児童館のマーケティング」吉成信夫 じどうかん2007春号、夏号)



IV. 子育て・子育て Q&A



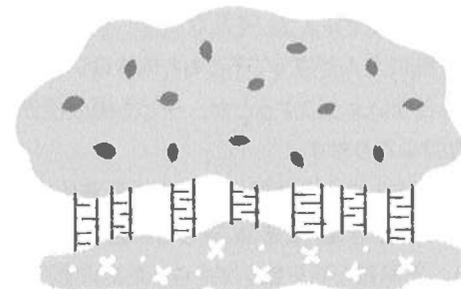
Q & A について

ここからは、子育て・子育て Q & A として、いわて子どもの森地域巡回事業の情報交換会で出された、子どもの育ちに関わる支援者の皆さんの普段疑問に思っていることや、感じていることを取り上げてみました。

それぞれの質問を見ていただくと、いろいろな支援の仕方、声のかけ方が思い浮かびますよね。子どもたちそれぞれに、個性があって、昔から「誉めて伸びるタイプ?」、「負けん気の強いタイプ?」なんて言ったりしますが、そんな風に一人一人が違うことを考えると、本当は、子どもと関わる、子どもを育てるのに、一般的なマニュアル、100点満点の答えなんて無いのかもしれませんが。ですから、このQ&Aは答えが書いてあるマニュアルではありません。子育て・子育て支援の現場から多く寄せられる、「こんな時、どう対応したらよいの?」という質問を一緒に考えて、読んでくださった皆さんが、「なるほど、そういう考えもあるのか」とか、「今まで通りの関わり方で良かったんだ」ということを、それぞれに感じてもらえたらと思って作りました。子どもたちに接する姿勢を振り返る機会にして欲しいと思います。

先にも述べたとおり、目の前の子どもたちそれぞれに寄り添った対応ができれば良いのですが、少ない職員で沢山のお子さんに関わる子育て・子育て支援の現場では、「それは理想だけど、そうしたいと思っても、実際にはなかなか一人一人にじっくり向き合う時間はとれないな」と思ってしまう。それでも、子供たちの為に、何とか時間を作りたいと思ってしまう。

ただ、なかなか思うようにできていないと思っても、皆さんが、子どもたちにまっすぐ向き合って、一生懸命子どもたちのことを考えている姿は、子どもたちにしっかり伝わるのだということは忘れずにいて欲しいと思います。



子どもたちは、大人がどんなに「ケンカしないで仲良く遊ぼうね」なんて声をかけたところで、遊びに夢中になればなるほど、ちょっとしたことでケンカしてしまいます。自分の思いと相手の思いとがぶつかったときに起こるのがケンカ。その時、子どもたちには、たとえ相手とぶつかったとしても、言いたいことや、わかって欲しい気持ちがあるのでしょうね。ケンカばかりも困るけど、ケンカは子どもたちが相手に自分の気持ちをどう伝えるか、ぶつかった時にどうやって乗り越えるかということを経験するとても良いチャンスと考えられます。昔と違って、大勢の兄弟や近所の子どもの中でケンカや仲直りを繰り返して、コミュニケーションの力を磨く機会が少なくなったと言われる今の子どもたちにとっては、児童館や放課後児童クラブのように異年齢の子どもたちと関わるができる貴重な機会かもしれません。

子どものけんかの理由を、大きく分けてみると

- A. 遊びの中でわがままのぶつかり合い
- B. 夢中になりすぎて度を越してしまう
- C. (自分だけが楽しむために) いじわるやズルをする、いじわるやズルをされることへの反発

A、Bは感情が理性でコントロールできなくなった例ですので、感情が落ち着けば仲直りできます。しばらく原因となるものから離れる、ケンカになった相手と距離を置いて落ち着くのを待つことが先決でしょう。静かな部屋や、外野に刺激されないようなところに移動できれば良いのですが、沢山の子どもたちが過ごす場所では、それが難しい時もあるでしょう。そんな時は、例えば、部屋の中でちょっと立ち位置を変える、壁側に大人が立って子どもと向き合い、周りの子どもの動きなどが子どもの視線に入らないようにするとか、子ども側の視界を変化させると、気持ちを切り替える手助けになります。

それでも気持ちがおさまらない場合は、気持ちを言葉にしてもらいましょう。ケンカするほどの大きな「思い」を聞くときは、子どもの話を遮らずに、とにかく聴いて、受け止めてみましょう。不思議と話を聴いてもらっただけで、落ち着くこともありま

すよ。

Cには、少し継続的なケアが必要な場合があります。

ただし、小学校低・中学年のうちは、いじめへの反発がけんかになって爆発する場合がありますので、前に挙げたA、B、Cとは見分けて対処することが必要です。先に述べたように、子どものコミュニケーションの力を伸ばす役割があることを考えると、大人は手を出しすぎず、心配しすぎず、自分たちでなんとかして解決するのを待つという忍耐の姿勢も求められそうです。ただし、相手や自分の心とからだを傷つけるようなこと、相手の人格を傷つけるようなことが起こりそうな時には、毅然とした態度で止めるなど、職員は子どもたちの状態を見極めて、様子を見ながら、臨機応変な対応できるような目を養っておくことが必要です。



子どもたちと関わっていると「何もしていないのに叩かれた!」と訴えられることが結構ありますが、よくよく話を聴いてみると、叩いた子にも言い分はありそうです。同じ「叩く」という行動でも、理由は「遊びを邪魔された」、「相手が怒るのが面白い」、「言い合いになったけど、言い返せなかった」、「遊んで欲しかった」、などなど、ほかにもいろいろと考えられそうですね。同じ行動でも、理由や背景があるという視点に立つと、「何もしていないのに」と相手に受け取られる場合には、行動を起こす引き金になった気持ちの流れが、他の人にはわかりにくい形で表現されていることも考えられますね。相手に伝わってなくても、子どもにとっては大問題だったりするので、そのときの気持ちは、なかなかおろそかにはできません。

もちろん、理由があるから叩いても良いとか、叩かれる方が悪いと言いたいのではありませんよ。まずは、とにかく行動をすぐにストップさせましょう。その時に沢山のことを言う必要はありません。ただ、行動をやめて欲しいことを伝えましょう。

どんな場合でも、悪いのは「暴力」や「相手を傷つける言葉」という行動であって、その子どもの全てではないので(悪い子と悪いことをした子は大きく違いますよね)、落ち着いたら、まずは子どもの話を聞きましょう。

子どもの気持ちの準備ができていない時に叱っても、子どもからすれば「何で叱られるの?ま、今だけ我慢すればいいや」という気持ちになりそうです。また、気持ちが顔や態度に出てしまい、「あの子は、何度言っても聞かせても分からない」と受け取られ、それを繰り返すうちに子どもが「誰も自分の気持ちをわかってくれない」と他者への信頼感を失うという悪循環に陥ってしまいそうです。

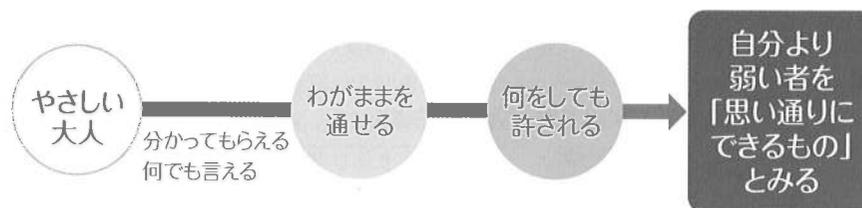
大人は「なぜそういう行動をするのか?」という視点で子どもの話を聞きますが、「どうしてなの?」と子どもにストレートにぶつけてしまうと、ともすれば尋問のようになってしまいかねませんし、上手く理由が説明できなくて余計に頑なになるかもしれません。まずは、子ども自身の解決する力を信じ、子どもの気持ちを受け止める姿勢で接することで、ありのままの自分でいいんだと感じる力(自己肯定感)や自分もできると信じる力(自己効力感)を育むことにつながります。自己肯定感や自己効力感は、子どもたちが成長するうえで、いろんな壁にぶつかったときに、子どもたちのこころを支え、壁に立ち向かうためのエネルギーの源になるものの一

つです。

子どもの話を聞いてみて、なんだか分からない、漠然とした不安やイライラが募って、たたいたり、乱暴したりしている場合には、発散が必要かもしれませんので、暴力ではなく、思い切り身体を動かすような遊びに誘って様子を見ましょう。

また、小学校低学年の頃は、幼児期の延長で、大人が嫌がることをすることで大人が大騒ぎするのを楽しんでいることもあります。暴力の矛先が大人に向かう場合は、冷静に嫌な気持ちを伝え、許されないことははっきり伝えましょう。

◎子どもの大人への乱暴がエスカレートする例



叱ることではなく、大人も子どもも、他者からの乱暴、暴力は心もからだも傷つけられることで、してはいけないことを伝えることが大切です。

また、時々、執拗に相手の本当に嫌なことや怒りそうなことを狙って繰り返したり、べたべたと甘えてきたと思ったら別人のようにひどく拒否的な態度をとるといった行動が見られることがあります。そんな時は、子ども自身が他者と関わることに不安が強く、相手と仲良くしてみたいけど、まだ怖いので信頼できる相手かどうか繰り返し試しているという場合があります。信頼できる気持ちが持てるまで非常に時間がかかったり、気持ちが不安定な状態が長く続いたりすることがあります。

そういった状態の時は、特定の相手にだけ矛先が向けられ、子ども自身も感情のコントロールが難しい場合があります。ひとりで抱えきれない場合や対応に戸惑うときには、子どもの心の状態を確認しながら長い目で関わる必要がある場合も考えられます。県や市町村の保健師、児童精神科や学校に配置されているスクールカウンセラー、児童相談所等の専門家にアドバイスを聞いてみると、支援のヒントが得られるかもしれません。



子どもたちの「うそ」や「盗み」にどう向き合う？

奥州市水沢青少年育成市民会議 主任事務局員 大村千恵

まず、筆者は教育者でも研究者でもなく、ただひたすら子どもたちの人生の伴走者として寄り添ってきた体験からの見解であることを前置きといたします。

私も子どもたちの「うそ」や「盗み」については、ずっと心を痛めてきました。自分がアドバイスをいただきたいくらいですが、過去の事例を紹介することによって、自身の取り組みの検証につながるのではないかと考えた次第です。

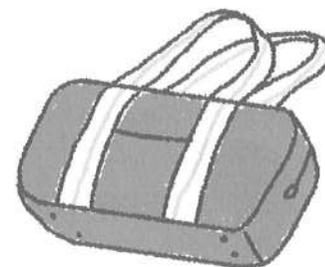
※エピソードはプライバシー保護の為、一部脚色して掲載してあります。

エピソード1：プチ家出を繰り返すA子さん

中学生のAさんは、子どもの居場所「パステルハウス」をよく利用する常連でした。

ある日、大きな荷物を両手に持って「親に出て行け!と言われた。」と夜になっても帰ろうとしません。気の毒だなど思いながらも未成年であることから、一緒に夕食をとった後「やっぱり、まずお家に断ってからこの後のことを考えよう。」と提案し、彼女の家に連れて行きました。そこで何と驚いたことは、家族が警察に捜索願を出していたのです。昨晩も出て行った先から連れ戻したばかりということでした。私は車中に残したAさんに「お母さん心配しているよ。家に入ろう。」と促しましたが、嫌がります。3時間ほど説得を続けいよいよ夜中の12時を回ったので、力づくで下ろそうとしました。すると彼女の形相が陰しくなり全身痙攣を起こし始めました。尋常ではないと判断し、家族の了解を得て一晩我が家で預かることにしました。翌日の夕方、家族のもとへ送ろうとしたら、ずっと穏やかだった表情がまた豹変していきます。学校の先生からも電話があり、会って相談することになりました。対面した先生からの第一声は「大村さんは騙されています。A子の言うことは全部うそです。」でした。昨夜のただならぬ痙攣の様子を伝えると、「それも芝居ですよ。」と一笑に付され、今までの学校での彼女の数々の素行を知らされました。- 大分重症だな - と感じながらも私はこうお伝えしました。「Aさんは確かに事実と違うことを言っているかもしれませんが、けれども彼女の中に紛れもない真実が一つあります。それは、家に帰らないということ。」

その後、居場所ではスタッフのサイフから大金が抜き取られたり、スタッフ日誌が紛失するなど、深刻な問題が続発しました。そのいずれのケースにもAさんの存在が見え隠れします。緊急スタッフ会議を開き、どう対処するかが話し合われました。あるスタッフから、「このごろ居場所ではいろんなことが起こりすぎている。緊急事態だ。警察に通報するなど徹底して問題を解決するか、早期解決の見通しが立たないなら居場所を閉鎖すべきだ。」という発言がでました。重苦しい空気の中、同席した高校生が口を開きました。「サイフに手をかけてしまった子のことだけど……。ただ単にお金がほしいだけでやってしまったんじゃないと思う。寂しかったんじゃないかな。自分のほうを向いてほしいとか、気づいてほしいとか。自分にも盗むとかではないけど、似たような経験がある。絶対後悔していると思う。つらい気持ちをここに来て誰かに伝えたいと思っているはず。彼女にとってここはとても大切な場所。ここが閉ってしまったら、拠り所をなくし、私たちの手の届かない闇の中に消えていってしまう。大人の皆さん、なんとか頑張ってここを閉めないでほしい!」この一言で、閉所の危機を乗り越えたのでした。



エピソード2：運命の出会い、Bくん甦る

ツッパリを自称する高校生Bくんは、居場所「ホワイトキャンパス」に足を踏み入れた日から大きく人生が変わりました。その日彼は、繰り返してきた悪行にケリをつける覚悟で、東京への家出を決意していたのです。そうはいっても十代半ばの少年、ふるさとへの未練が捨てきれず、出発の時刻を遅らせようと時間つぶしに訪れたのが「ホワキャン」でした。そこで二つ年上の幼馴染の先輩Cくんと運命の出会い(?)を果たすのです。カリスマ高校生のCくんが、自暴自棄に陥った後輩を優しく諭すと、Bくんは人生を仕切り直す決心をしたのです。それからのBくんは見違えるほどに変容を遂げ、あるとき「俺って毎日成長しているかもしれない。自分に感動するでえ〜!」とうれしそうに語っていました。

そんな彼も年頃です。ある日、他県から訪ねてきたガールフレンドと夕方になっても一緒なので、「家族に心配かけないようにね。」と促したところ「大丈夫。親には言わないで。」と彼。少し気になりましたが、「君を信じているからね。」と

言って別れました。だいぶ後になってから分かったのですが、結局裏切られることになりました。特にそのことにふれることもなく数日が過ぎた頃、深刻な顔をしたBくんがやってきました。「俺は二重人格かもしれない・・・。」前向きに生きようとする自分と、昔のやんちゃだった頃の自分が交互に顔を出すというのです。私はただ静かに彼の言葉を受け止めるしかありませんでした。すると、一緒に付き添ってきたCくんが口を開きました。「伸びようとする自分も、後退してしまう自分も、どちらも自分なんだと認めてやれ。そして、こうなりたいと思う自分を少しずつ大きくしていけばいいよ。俺なんか、周りの顔色を見ながら世渡りしてきたから幾つもの自分がある。二重人格どころか五重も六重にもなるかもしれないぞ。」

二つの事例を紹介しましたが、子どもたちとのかかわりの中でいろいろな問題が発生しても、基本的には学校とか家庭にすぐに連絡をするということはしません。(子どもの最善の利益に繋がると確信した場合のみ。この10年で2件ほど。)

まずは当事者である子ども本人としっかり向き合います。時にはだまされたり、裏切られたり、試されたこともありました。「君のことが心配なんだよ。とても大切なんだ。幸せになってほしいんだよ。」という気持ちを抱えながら寄り添うだけです。思いは必ず通じます。子どもたちとの間に信頼関係が生まれたとき、彼らは真の姿でぶつかってきます。ある少女からこんなメッセージをもらいました。「不良になってやる!とおもったけど出来なかった。信じてくれる大人を裏切りたくなかった。大、大、大好きな大村さんを泣かせたくないも〜ん!」



最後に、大人は子どもの問題をいろいろ考えますが、問題の現状認識は当事者が一番わかっています。解決の方法も本人(子ども)たちとの意見交換の中から引き出しています。

同世代同士のほうが大人よりもメッセージの伝達者になることを、前述の事例が実証してくれています

ある放課後児童クラブで、練習着姿で「じゃあね、いってきまーす」と放課後児童クラブから出かけて行く子どもたちを見かけました。放課後児童クラブの行事予定の掲示板には毎日、スイミング、野球、サッカー、バスケ、ピアノなどと習い事やスポーツ少年団とそれに出かけていく子どもたちの名前がびっしり書かれています。たくさん子どもたちが利用する放課後児童クラブでは、毎日、子どもたちが、スポーツ少年団などで忙しいため、誰が何時にどこへ行くのかを安全の為に把握するだけでも大変というお話を聞きました。

スポーツ少年団と言うと、ある程度の複雑なルールにも対応できる、小学校中学年くらいから参加できるようになるというイメージでいたのですが、どうやら少子化の世の中では、どこのスポーツ少年団も参加者が少ないため、小学校1年生から入団できるところもあるようです。その上、いろいろな習い事と掛け持ちしていたりして、子どもたちは、時間を忘れて遊ぶなんてことはできそうにもないほど、ハードな日常を送っているようです。

ただ、気になるのは、土曜日も日曜日も行事や試合で忙しくて、月曜日からぐったりしている子ども達が多い...というお話を耳にしたことです。もちろん、すべての子どもではありませんし、子どもたちが自分で選んで、好きで参加して、疲れるけど楽しいと感じられる充実した時間は、子どもたちが育つ上でとても良い経験になるでしょう。

でも、子どもはからだも心も育ち盛りです。大すぎる負担をかけてしまうことは、健やかな成長のためになりません。どんな活動も「子どもたちのため」がスタートラインだったのであれば、子どもの様子をしっかり見て、子どもが楽しむ余裕もないほど疲れていたら、無理せずに休むことを教えるのも、大人の役割だと思います。

さて、児童館や放課後児童クラブでは、忙しすぎて少しの時間しか過ごすことができない子どもたちとどのように関わるか、どうやって関係を作っていくか、ということですが、児童館や放課後児童クラブが子どもたちのほっと息がつける安らぎの場所になるように、迎えられるようにしたいですね。短い時間でも、一緒に遊んだり、お話を聞いたり、時には休ませたりすることで、忙しい時間の合間の楽しい時間を子どもたちに提供しましょう。短い時間でも「大丈夫、ちゃんと気にかけているからね」というサインを送り続けることで、がんばり屋さんの子どもたちが、少しでも羽を休められるようになるといいですね。

子どもは、大人が眉をひそめるような言葉が大好きです。幼児期は特に「ウンチ」などと言って、大人が「やだ、汚い!」と言うのを聞いて、叱られるのもなんのその、げらげらと笑っています。大人は、子どもが望ましい行動をした時は、初めは喜んで誉めても段々に当たり前に思っただけで反応しなくなることが多いのですが、反対に望ましくない行動は、繰り返せば繰り返すほど、素早く、強く反応してしまいます。子どもからすれば、大人が期待通りに反応するのが面白くて、叱られているという感覚はあまりないことも多いです。

そうして、遊びの1つとして、大人の気を引く絶好の手段として学習してしまうことがしばしばあります。小学校低学年くらいは、周りの注目を引く手段としてわざと汚い言葉を使ってしまうこともあると思います。

注目してほしいとわざとやっている場合には、大人はあまり反応しないで様子を見てみると、「なあんだ、あまり反応してくれないや」と落ち着いたりします。

また、小学校中学年くらいからは、仲間意識が強まり、同年齢の友達の集団を中心とした子ども社会が生活の中心が動いてきて、大人と距離を置いて自分たちの世界をつくり始めます。発達段階でも、ギャングエイジなんて名前がつく時期でもあり、子ども同士で徒党を組んで行動することを好み、大人に干渉されることを嫌がるため、大人が嫌がるような言葉を使って一人前の気分になったり、友達に対しても格好を付けたがりますので、テレビなんかで流行っている物や言葉には敏感に反応します。大人に注意されると「うるさい」などと言って素直に聞いてくれません。そういう時は、聞く準備ができていない時。仲間の手前もあって、何を言ってもああ言えば、こう言うとうるさいばかり、そんなときには引くタイミングも肝心です。1人である時に声をかけると、案外素直に聞いてくれたりするものです。

この質問を投げかけた時に、現場の皆さんが答えてくれた中で印象的だったのは、「たしかに、あまりにもひどいときは厳しく注意するけど、いつまでも、どの場面でも同じ様に乱暴な言葉遣いで話す子どもは、殆どいないんです。まして、家庭や学校でいいところを見せなくちゃと頑張っている子どもたちは児童館や放課後児童クラブでリラックスしているのかな、と心にゆとりをもって長い目でみていきたい」という言葉です。

子どもたちは、成長のなかで、様々な行動をします。大人をと距離をおきたがったり、他の人の言う通りにしたくない時期も大切だということを頭に置きながら見守ることと、相手を傷つける言葉を面白おかしく口にするなど、自分にも相手にも良くないことは、大人は毅然と注意することの両面のバランスを取ることが必要そうですね。

また、「このやろう」と言ったのを注意したら、「このやるちゃん」と言い換えたという例があります。そのときの自分の気持ちを表す言葉を「このやろう」以外で表現できなかったんですね。たくさん言葉を操っているようにみえても、その言葉にこめられているイメージ内容は、まだまだ少ないと思います。遊び、生活のなかで子どもが用いるくことばの中味を豊かにする、自分の気持ちを適切に表現できる言葉を見つける喜びを共有するということが大事だと思います。

場面に応じた言葉遣いを知ってもらうためには、地域の大人に何かをお願いしに行くなど、非常に緊張する場面も含めて、いろいろな相手と話をする場面の経験を増やすことも、言葉遣いを見直すきっかけにはなりそうですね。



いじめを受けることで、子どもの心や身体は傷つき、人を信頼する気持ちや自分を大切にすることができなくなり、自分は価値があると信じられる気持ちを失わせてしまいます。それは後遺症となって残り、大人になってもその人を苦しめることもあるほど、とても深刻な問題であり、ケンカのように、様子見というわけはいきません。すぐに対策をたてて、子どもたちを守らなければなりません。

どんな理由があれ、他者から一方的に傷つけられてもいいことはないのです。関わる大人は、いじめることはもちろん、はやし立てることも、傍観することも、許されないものとして対応しなければなりません。

そして、忘れてはいけないのが、相手からされた行為や声掛けがいじめかどうかは、された本人がどう感じ、どう受け止めるかによるということです。大人が、一般的な基準や自分の経験に当てはめて判断するべきではないこと（「他の子は…」、とか「昔の子どもは…」など）は気をつけなければなりません。たとえ、大人から見たいしたことがないように見えても、本人が、繰り返される行為や言動から、精神的な苦痛を受けていれば、それはいじめです。

けんかのところで書きましたが、低学年のうち、ケンカやトラブルの形で大人のいるところで見られる場合があります。職員は、いさかいがあった時に、けんかなのかいじめが絡んだトラブルなのかを見分ける力を持つことが求められます。

いじめを受けているお子さんは、言葉で訴えることができなくても、気をつけて見てみると、食欲や意欲が減退したり、1人で、ぼおとして過ごしていることが多くなるなどのサインを出していると言われています。また、いじめを受ける相手と一緒にいる場面への拒否反応を示したり、腹痛や頭痛などからだの不調を訴えることもあります。また、いじめが原因でも、落ち着きのなさや乱暴、投げやりな行動が見られることがあり、いじめっ子が実は他の場面ではいじめられっ子だということも考えられるのです。お子さんに気になる様子が見られたら、子どもたちと一緒に遊んだり、一緒に過ごす時間を意識的に増やしましょう。大人の目が頻繁に入ることによって、抑止力になったり、大人の方でも、子どもたちの関係性がどうなっているのかをよく見る機会になります。

もし、子どもが勇気をだして話をしてくれたら、いじめられた子には、「(いじめ

られたのは) あなたが悪いからではない」と言うことをはっきりと伝えていくこと、子どもたちが恐れるような「仕返し」や「いじめがエスカレートする」ことから、子どもを守ることももちろん、いじめた側にも、気持ちを聞いて支えるような存在も必要なことは忘れないようにしてください。

いじめから抜け出すためには、学校だけでなく、たくさんの世界を持つことが大切です。学校でいじめられていても、地域で別な友達がいれば、『抜ける』ことで自分を失うことはありません。

学校以外に他の世界がまだない子には、いじめの「仲間」から抜けたとき、一人ぼっちではないと思えるように、かかわる大人がその子と同じ地平で一時仲間になって関係をつなぐことも子どもを支える上で必要になってきます。

その中で、少しずつでも、自分は大切にされるべき存在であることに気付き、自信とエネルギーを回復させてもらいたいものです。



NGO 盛岡・マニラ育英会 代表理事 村田知己

私が代表をしている団体は、フィリピン・マニラの経済的に貧しい子どもと障害がある子どもの教育支援を行っています。同時に日本の若者を新の国際人にしようという青少年育成事業も行い、多くの方々が社会で活躍しています。

以前、私はマニラの小学校とハイスクールを視察調査に行きました。5つの学校の教師と児童・生徒、そして父母に多数面接したり、クラスの授業に参加しました。

そこで、私は日本のいじめ問題について、問いかけました。いじめで登校できなかったり、自殺する子どももいることを伝え、マニラの実態と助言を伺いたかったからです。

すると、矢継ぎ早に質問が飛んできました。「いじめって何ですか?」ということです。マニラでは、助け合いながら生活しないと学校生活そのものが成り立たないのです。いじめについて、さらに説明すると、「それではギャングのようではありませんか?」と深いため息が帰ってきました。

そしてまとめると3つの助言を頂きました。

- ①人間がこの世で一番の存在ではないことを、大人が子どもに教えること。大切なことは、神様が喜ぶことで力を出すこと。
- ②大人は、人をいじめる人間は立派ではないし、嫌いだということを普段から伝えること。
- ③生徒会の力が強い学校では、いじめを許さない決意と、いじめる側にさせないことを、子どもも大人ももっとするべきだ。

とても胸に響く言葉が、沢山ありました。

ある日曜日の午後、私はマニラの経済的に貧しいスラム地区の街角で、『めんこ』でフィリピンの子供たちと遊んでいました。

すると、小学校高学年くらいの姉が、何か悪いことをしたらしい弟に話をしている声に気付きました。会話の内容はこうです。「あなたは相手に悪いことを

したの。それは分かる?」、頷く弟に、「では、どうしたらいい?」と姉、弟は相手に謝ると言いました。姉「後は誰に謝るの?」、弟「お父さん、お母さん…。」、姉「あとは?」、弟はしばらく考えてから「神様」と答えました。姉は、「神様はいつも私達を見守っている。良いことも悪いことも……。それを忘れないで。」と諭しました。

マニラのスラム街の街角で、服の大きさもあっていない姉弟の会話に、とても感動しながら2人の姿を見つめました。

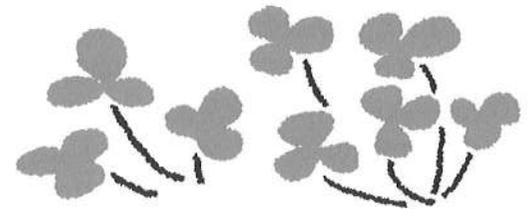
ある人は、神様を大自然とも言います。いわて子どもの森は、一戸町の雄大な高原にあります。大自然の懐です。

「人間は、地球上で一番上の存在ではない。」

「人を、環境をいじめる人間は私は嫌いだ。」

「お金の物差しだけでは、素晴らしい人間は計れない。」

……大人は自分の言葉で、子どもに大切なことを伝えて欲しいと思います。そのきっかけづくりに、子どもの森がもっとなって欲しいと期待している毎日です。



「発達障がい」がある子どもたちと関わる上で、 気にかけておくことはありますか。

カナンの園ヒソバ工房 施設長 佐藤真名

例①「軽度発達障害」と診断されて、「うちの子は軽度だったんだ」と喜んだお母さんがいました。どのように捉えればいいのでしょうか。

- 「軽度」という表現は、知的な発達レベルを測定する基準（知能指数＝IQ）において、障がいが無い、又は軽いということです。「軽度発達障がい」の障がい特性には、コミュニケーションや社会性の弱さ、感覚面や行動の特異性などが挙げられます。ですから、症状が軽い、支援がしやすい、ということとは結びつかないものです。むしろ、知的な遅れがないために、周囲や本人自身も様々な困難さを障がいに起因するものと気がつきにくく、そのことでさらに苦しんだり、複雑化していく場合があります。
- （「いわて児童館テキスト vol.2 | 軽度発達障害についての基本的理解」参照）

例②児童館のトイレが大好きで、声をかけないとずっとトイレにいる子どもがいて、他の子どもたちから「トイレに行きたいけど、〇〇ちゃんがいるからガマンしている」、という話を聞きます。どのように対応すればいいですか。その他、いわゆるこだわり行動をうまく止められないことで悩むことがあります。

- まず、その子がどうしてトイレが好きなのかを分かるところから始めてください。自閉症など、脳機能に障がいがある子どもたちの中には、感覚面でその人特有の特異性を持った方たちがいます。水の流れる音が好き、その空間での音の響き方が好き、臭いが好き（トイレそのものの臭い、あるいは芳香剤の臭いかもかもしれません）、窓から差し込む光の様子が好き、狭い空間が好き、等々…。またはトイレに居ることで友達や職員の方から声をかけられるのを期待して待っている場合もあるかもしれません。理由がある程度わかったらその上で、代替できる「楽しみ」があればそちらに代えていくことや、ルールを決めて伝えていくことも大切でしょう。「こだわり」行動については、こだわり行動だけを限定して否定することや一方的な「しつけ」は、問題を複雑化させたり、人間関係をこじれさせる結果につながる場合が多いことも気に

かけていたいものです。

例③遊びやゲームの中で、自分が負けるとわかると途中でかんしゃくを起こしたり、逆に勝つまで何度でもやめない子が増えてきているように思います。発達障がいを持つ子どもに多いように思いますが特徴なのでしょうか。また、診断はされなくても、そのような傾向の子どもが増えている、ということなのでしょうか。

- 確かに世の中全体が「結果」に目を向ける傾向が強くなる中で、子どもたちにもそのような結果重視の価値観が浸透していているように思います。ですからそれを安易に発達障がいと結びつけることは出来ないと思います。勝つことを目的や目標にしていくことで、遊びに熱中したり、ゲームやスポーツが白熱し、それがますます楽しく好きになる経験は得がたいものです。しかし、必ず「勝つ人」がいたら「負ける人」がいることも確かですし、自分とは違う立場の人に目を向ける気持ちが大切だと思います。

また、自閉症の人たちの特徴の一つに、シングルフォーカスと呼ばれるものがあります。一つのことに対応するものは一つだと捉える傾向です。つまり、「勝つことも負けることもある」ということを理解したり、受け入れたりすることが苦手だと言えます。この点から言うと複合的な要素が多ければ多いほど、ゲームの前に細かくルールを伝えておくことや、結果として勝つことも負けることもあるし、場合によっては引き分けもあることを伝えておくことも配慮として大切なことです。また、その子の理解の仕方を回りの子どもたちに説明しておくことも必要な場合もあります。

基本的な考え方としては、どの子についても言えることだとは思いますが、何か問題が起きた時には、まず問題を整理することが大切です。本人の問題なのか、周りの人の問題なのか。困っているのは誰か。その原因は何か。すぐに解決しなければならない問題か、それとも時間をかけることが必要なのか。自分（たち）の力で解決できることか、別の人や組織の力が必要なことか。明らかに出来ることと、漏らしてはいけない情報があるか。一過性の問題か、繰り返す可能性がある問題か、等々…。その他にも考えられることがあればそれらを書き出し、相関関係なども分類して整理してみると、やるべきことが見えてくる場合があります。

また、その中で、近年大きな問題となってきていることとして、児童虐待や犯罪

被害に関わる事、そして触法行為に関わる事が挙げられますので、このような問題については特に気にかけておく必要があります。

例の①でも触れましたが、「軽度発達障がい」と呼ばれる子どもたちは、知的発達の遅れはないため、障がいを起因とする言動や特徴を周りの人が受けとめることが出来なかったり、見通しが持てないままで感情的な接し方をし、それがエスカレートして行くことがあります。家族からの児童虐待や仲間からのやいじめ、時には教育者からも否定的な関わりを受ける場合もありますので、何か変わった様子があった場合は、それらを疑う必要があります。いわれない言いがかりをつけられたり、恐喝、性犯罪の被害者となるケースも見られますので、これらのリスクを支援者として覚えておくことは大切です。

また、総合的な判断をする力が弱いゆえに、あるいは悪意のある人達にうまく利用されて、いわゆる触法行為に及ぶ場合もあります。世の中の仕組みやルールを本人がわかる形で正しく伝えることや、仲間関係などにも気を配っておきたいものです。

〈カナンの園〉

1972年11月設立

主に知的障がいを持つ方々を支援し、関連する社会福祉法人では、児童期から成人期に至る生活の場、日中活動と就労の場を、同じく学校法人では青年期教育の場などを整備している。現在、児童、成人のそれぞれの入所施設、通所施設（3ヶ所）、福祉工場、ケアホーム（12ヶ所）、養護学校などを運営している。

連絡先：児童施設「奥中山学園」岩手県一戸町中山字大塚4-6

TEL：0195-35-2314

URL：<http://www.canaan-jp.com/> E-mail：info@canaan-jp.com

08

宿題どうする？

たくさん子どもたちが、学校が終わってからの長い時間を、児童館や放課後児童クラブなどで過ごします。児童館や放課後児童クラブは、生活や遊びを通して、子どもたちの健やかな育ちをサポートする役割を担っている場所です。たしかに、生活の中には「学習」ということも含まれてくるとは思うのですが、それがメインではありません。例えば、保護者から、「勉強を見て欲しい」という要望はあるようですが、子どもたちの選択肢の中に宿題をする時間や場所は提供できたとしても、学習塾や学校のように、お子さんの学習の進度まで責任をもつことは、児童館の役割として馴染まないところです。

放課後児童クラブは生活の場であり、「生活」の中に「学習」はもちろん含まれてくるところですが、それだけに重点をおくことはできませんね。児童館、学童の先生たちのお話を聞くと、ほとんどが、「宿題すんだの？」と声はかけるけれども、「勉強しなさい」と強制はせず、子どもたちの自主性に任せているという対応がほとんどでした。

ただし、長期休みには、児童館でも遊ぶ時間になるまでは、図書室などで学習をする時間に行っているところがほとんどです。

また、強制はしないけれども、「宿題が済んでから遊ぶこと」と声をかけていて、高学年の子どもたちがやり始めると、自然と皆が宿題を広げるところもありました。

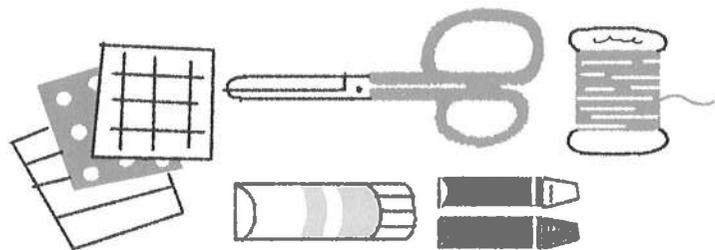
それぞれの児童館、放課後児童クラブによって、児童の数もスタッフの体制も、建物の状況も様々なので、やり方は色々あって良いのだと思っています。スタッフ同士で、子どもが安心して過ごせる居場所としての役割について、宿題についてなど、子どもと関わる姿勢についての共通理解があってこそのことだと思います。



親御さんから希望があったときには、曖昧にせずに、それぞれの児童館や学童でのやり方を保護者と相談しながら組み立てていく良いチャンスかもしれませんね。

児童館や放課後児童クラブでの子どもたちの過ごし方は、ある程度、子どもたちが選ぶことができますので、子どもたちが「勉強したい」という選択肢にも応えられる準備をしておかなければなりません。

ただ、残念なことに、現状として、子どもから宿題したいと希望があっても、人数が多すぎて、静かに勉強できる部屋を確保することができないという大変さもあるようです。



児童館、放課後児童クラブ側から見て、地域の人たちとのちょうど居心地のいい距離感ってどのような感じなのでしょう？

反対に、地域の人たちから見た、子どもたちの居場所とのちょうどいい距離感ってどのような感じなのでしょう？

地域のみなさんが、子どもたちのおじいちゃんおばあちゃんや親戚のように、子どもたちの成長を楽しみにしてもらい、いざという時に協力し合える関係を作るためには、地域の行事に児童館側がお邪魔してみる、お便りを配るなど、少しずつ児童館のことを知ってもらい、地域の方とスタッフや子どもたちが顔と顔でつながっていくことが大切なのかも知れませんね。

小学生ともなると、親であっても子どもたちを四六時中見守ることは、難しいことだし、子どもにとって見守りではなく、見張りと感じられるかもしれません。そこで、子どもの安全を守るのに頼れるのは地域の力。近所で遊んでいる子どもたちを見守ってくれるのは、地域のみなさんです。

しかし、都市部では、子どもたちを見る地域の視線が厳しくなっているようです。今のところ岩手では、ほとんどそういう噂は聞きませんが、学校の近隣の方の中には、子どもたちの声が騒音だと感じている人がいるという話さえ耳にします。子育て中のお母さんたちが「子どもを連れて歩いていると、周りの人の視線が冷たいと感じる」という状況もあるようです。子どもに関わる大人からすれば、不安を感じずにはられません。

取材をした児童館、放課後児童クラブでは、地域と全く交流がない、福祉の担当者とも連絡が上手く取れない、という所から、地域のみなさんが「児童館をもっとよくなる会」（コラム参照）というのを立ち上げて、児童館を全面バックアップしているのが、地域の力をフル活用しているという所まで、様々でした。もちろん、地域の状況やその児童館・放課後児童クラブの立ち上げの経緯、今児童館がおかれている状況等は多種多様ですから、一概にこのやり方がベストということはありません。

一関市真滝児童館では、平成15年9月に「真滝児童館をもっとよくなる会」が結成されました。

メンバーは地域の有志で構成されていて、地域全体で児童館の運営に関わっています。ちょうど、子どもの森スタッフがお邪魔したときにも、区長さんでもある、「児童館をよくなる会」の会長さんが児童館を訪れて、スタッフの方とお話をしている最中でした。何かあるときだけでなく、地域の方がちょっと様子を見に寄ってくれるのは心強いですね。

活動の内容は、行事などの運営に協力してくれるだけでなく、視察研修、講演会の企画、設備の改善など、より居心地のいい子どもの居場所を作るための要望を、行政に働きかけるなど活発に活動していて、活動内容については会報を地区の全戸に配付し地域のみなさんにも理解していただいているところです。

真滝児童館では、『児童館だより』も地域のみなさんに回覧して、児童館の様子をお知らせしているため、行事の時には、父母や地域の人がたくさん集まって、子どもたちの行事を盛り上げてくれます。子どもたちも楽しそうですが、大人たちにとっても楽しいイベントになっているようです。子どもがいない世帯も、ちょっと児童館に寄ってスタッフと話をしたり、子どもたちの様子を見て行くことがあり、そんな関係の出発点は行事に協力してもらったことがきっかけということですよ。

このような地域とのつながりの背景には、指導員がずっと変わらない顔ぶれで、子どもたちと関わることができていることも大きいように思います。また、真滝児童館が市内で唯一の健全育成型の児童館ということもあり、地域の人たちが学齢期の子どもたちの居場所として守っていきたいという気持ちを持ってきていること、地域みんなで子どもたちを育てようという気持ちが形になって現れているのではないかと思います。



真滝児童館をもっとよくなる会 会報

第8号 <事務局発行>

収穫の秋、食欲の秋になりましょ。おいしいものがたくさんある季節になりました。皆様も、児童館をもっとよくなる会の第4回総会も無事に終わり、増々、皆様と共に地域のみなさんの居場所としての児童館の活性化に取り組んでいきたいと思います。今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。

活動報告

講演会・総会

6月2日に「解禁一歩」を目標として「3つのSOS」をテーマに、約40名の参加者による講演会を開催しました。当日は、児童館の現状や今後の展望について、児童館の職員から話を聞きました。また、児童館の現状や今後の展望について、児童館の職員から話を聞きました。また、児童館の現状や今後の展望について、児童館の職員から話を聞きました。

じどうこまつり

7月28日(土) 第3回目のじどうこまつりを行いました。前回同様、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。

草刈り

8月19日(日) 早朝6時からじどうこまつり草刈りを行いました。朝早くから、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。

今年度市長「要望書」を提出します。

先日の例会で市長へ児童館の要望書を作成しました。内容は、児童館の現状や今後の展望について、児童館の職員から話を聞きました。また、児童館の現状や今後の展望について、児童館の職員から話を聞きました。

1. トイレの水洗化
2. 物置の整備
3. トイレの壁紙の張り替え

特に、トイレの水洗化とトイレの壁紙の張り替えについて、今年度は特に「トイレ」の要望書を作成しました。また、児童館の現状や今後の展望について、児童館の職員から話を聞きました。また、児童館の現状や今後の展望について、児童館の職員から話を聞きました。

随時 会員募集のお願い

じどうこまつりについて 子供たちの意見です

- 2年女子: 遊具を増やしてほしいです。また、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。
- 5年女子: 遊具を増やしてほしいです。また、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。
- 2年男子: 遊具を増やしてほしいです。また、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。
- 1年女子: 遊具を増やしてほしいです。また、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。
- 2年男子: 遊具を増やしてほしいです。また、お天気に恵まれ、大盛況でした。今回は、お天気に恵まれ、大盛況でした。

地域の学校に通うのも、児童館、放課後児童クラブを利用するのも同じ子どもたちなのに、お互いに、なかなか情報のやりとりが難しいと感じているようです。物理的距離は心理的距離とはよく言ったもので、学校の敷地内にあり、校庭で遊ぶことができるようなところに比べて、学校との距離が遠いところの方が、学校とのやりとりは、長く続かない傾向もあるようです。

例えば、新1年生は入学後から数ヶ月は、児童館や放課後児童クラブまで、放課後に担任が子どもたちと一緒に来て、スタッフと話をしたり、慣れるまでは様子を見に来ることもあるようですが、その時期だけに限られるところがほとんどというお話です。むしろ、新1年生も児童館や放課後児童クラブのスタッフが、学校まで迎へに行ったりすることもあるとのお話しも耳にします。

学校の行事予定や時間割変更などから、子どもの体調や行動など、どちらかと言うと、児童館、放課後児童クラブでは学校の情報が求めているようですが、なかなか、そのことが学校側に伝わりにくいかもしれません。

児童館、放課後児童クラブの皆さんからは、「学校とつながりを持ちたいなら、待っているよりも、分からないことがあったら電話でもいいから遠慮せずにどんどん聞いてみる。児童館や放課後児童クラブの方から働きかけて関係を作ってしまうほうが早い」というお話もありました。

まずは、最小限の連携として、「下校時刻」、「年間行事計画」は必ず知らせてもらえるように、根気強く伝えることが必要だと思います。

次に、学校での子どもたちの様子を知らせてもらい、お互いの行事のときに行き来するなど、子どもたちをよりしっかりと支えていくためのやりとりをするなどの、より濃密な連携へと発展させましょう。なかには、子どもが体調不良のときや、普段と様子が違うときはすぐに担任から、児童館のスタッフに連絡がきて、対応を相談することができるという例もありました。濃密な連携については、できそうなところから、じっくりかかわりをもっていき、くらの気持ちで働きかけていくのが良いかもしれません。

どちらにしても、児童館、放課後児童クラブ側から、積極的に関わることで、学校と連携をして子どもたちを支援したいという気持ちが伝わっていくのではないのでしょうか。

子どもたちを支えるうえで、親御さんとのかかわりも重要になってくことや家庭そのものが安定することが子どもの成長にプラスになるということを考えると、親御さんとのかかわりを大切にしたいけど、なかなか関係をとりにくいという悩みが聞かれました。

あまり肩肘はらずにお子さんのことを話し合える関係を作るためには、送り迎えのときにちょっと世間話をするなど、ちょっとしたつながりを積み重ねていくことがポイントのようです。

放課後児童クラブの建物中に、座ってお茶を飲めるようなカウンターを設けているところでは、親御さんがお迎えにきた時に、お茶を飲んで話をしていくことが増え、親御さんとの距離感が縮まったという話もあります。はじめは、「子どもさんのことでお話があります」よりは、「お疲れさま、お茶でも飲んでいって」という関係のほうが、親御さんも安心して心を開きやすいのかもしれませんが。若い支援者の中には、親御さんたちよりも年令が若く、子育ての経験がないことから、子どもの行動など気になることがあっても、親御さんにどう伝えて良いのかわからないという話もあります。何年も子どもたちと関わってきている、先輩の児童厚生員さんたちからは「相談を持ちかける、教えて欲しいという姿勢で話せば、わかってくれるかもしれないよ」というアドバイスもありました。

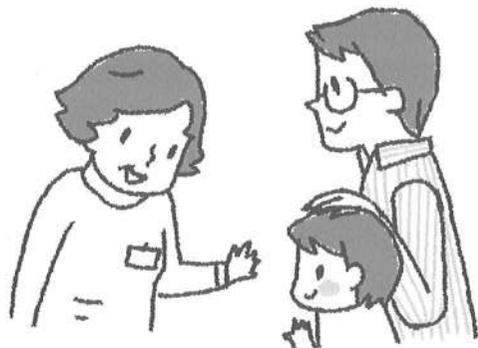
お子さんのことについてお話ができる関係になると、親御さんから子育てや家族のことについて相談を受けることもあるようです。内容によっては迅速に対応が必要なこともありますが、とにかくゆっくりお話を聞くことがスタートのようです。また、親御さん同士がつながるというのも、親自身の子育ての資源を増やすことになりすし、児童館のおたよりに、子どものことに限らず親の声を載せて、お互いを知るきっかけにしているというところもありました。親御さん同士がつながることで、児童館や放課後児童クラブを支える母親クラブ、父母会等での活動の活性化にもつながっていきます。

また、個々の子どもたちの支援だけでなく、児童館、放課後児童クラブの運営という面でも家庭の理解と協力が無ければ成り立たないところもあります。行事などには参加しても、父母会や運営についての会になると、参加が少ないという話も

耳にします。

親御さんが参加しやすいようにと工夫を凝らして、試行錯誤しているところもあります。例えば、父母会のときに行事のビデオを上映する、出席者だけに子どもたちの行事の様子などを集めた写真集を配布するといった、参加の動機付けを行うものもあれば、仕事帰りに直接寄れるように、開催時間を早め、軽食を準備して子どもたちにも放課後児童クラブで過ごしてもらいながら父母会を持つことで、親が一度子どもを連れて帰る等の負担を軽減し、参加しやすいように工夫しているところもあるようです。

また、親御さんからの苦情や要求を伝えられることもあると思います。まずは、最後まで、相手の話を聴くこと、特に、気持ちが先に立っている場合には、その思いや感情を全て吐き出してしまわないと、じっくり話し合うことは難しいと思います。また、具体的に何を、どう改善してほしいのかということを確認にすることも大切です。できれば、複数のスタッフで話を聴いて「言った」、「言わない」というすれ違いをなくすること。対応が難しいことは理由をきちんと説明すること、「こまめでならで可る」、「こういうやり方はどうか」と代替案を出すことなどの対応を心がけることで、不要なトラブルを招かないようにしましょう。



長期休みなど児童館・学童保育で過ごす時間が長いときに、遊びのプログラムや行事などで工夫していることはありますか？

この質問をしたところ、「うちが一番面白いことをやっています」とばかりに、どの現場でも必ず1つは「こんなことやっていて、大好評なんですよ」という行事に出会いました。

詳しくは、コラムになっていますので見てくださいね。それぞれ力作ぞろいなので、面白そう、やってみたくて興味を持っていただいた方は、各児童館、放課後児童クラブに聞いてみてください。

やはり、長期休みでは、学校がある間はなかなかできないような大きな行事やイベントを計画しているところが多いようです。ただし、イベントばかりでは、子どもたちが疲れてしまうし、「いつもどおりに、自分の好きな遊びがしたい!」という子どももいるでしょうから、特別なことはせず、長い時間をフルに活用して、子どもたちがやりたい遊びをじっくりやれる日と、イベントとのバランスが取れるようにしているというお話もありました。

どのイベントも内容を話してくださったときの、スタッフの皆さんの表情からも、子どもたちがどれだけ楽しめたのかが伝わってくるようでした。でも、よく見直してみたら、なんと、やろうと思っても真似できない?!というものも結構あります。

それというも、こうやって色々な例を聞いてみると、子どもたちに好評だったのは、「ご当地イベント」のように思えたのです。

その地域の児童館の環境だからできること、または、この人のいる地域だからこそ出来ること、を上手に生かしてイベントを作り出しているんですね。だから、「うちが一番面白い」という言葉が出てくるのかもしれませんが。

地域との連携とも重なる部分がありますが、やっぱりスタッフだけの力では、新しいイベントや大きなイベントをつくりだすのは、なかなか大変です。そこで、地域の〇〇さんが〜できるって聞いたよ、なんて情報を元に、皆を巻き込んで大きなことができるのですね。

いくら大好評でも、多くの支援者の皆さんは「やっぱりマンネリになるのは嫌だな」と感じているようです。もちろん、子どもたちのために、忙しいなか時間を割いて、研修で新しい遊びや取り組みを勉強しているのです。そんな時、母親クラブや地

域のみなさんが、「こういうのやってみたい」とアイデアを持ってきてくれたりすると、今までと全然違う企画が生まれたりします。これまでやったことの無いことで、どうやって実現すれば良いのかわからないようなことでも、「無理なこと」とあきらめずに、ちょっと調べてみたら、可能性が広がるかもしれません。ついでに「みなさんから頂いたアイデアだから」と言うことで、地域や母親クラブとの絆が深まったりして、行事一つで色々な可能性が広がることもありますね。



コラム③

とっておきの行事を紹介しちゃいます

●「お楽しみ週間」(仁王児童センター)

手話やふるしき遊び、料理など幅広い内容のワークショップを、長期休みに5日間日替わりで開催しています。どのワークショップを選ぶかは子どもたちが決めて申し込みます。もちろん、参加する子どもだけでなく、遊びに来ている子どもたちも皆が楽しめるようなイベントになるように工夫していますよ。なかでも、手話は母親クラブからの希望で実現しました。初めは手探りだったけど、今では、手話を教えてくれる高校生の手話サークルとの定期的な交流も生まれました。

●「自然観察」(上田児童センター)

子どもたちが楽しみにしているイベントは、大学の植物園で自然観察。植物園では沢山の植物や昆虫などを見ることができですが、なかでも子どもたちに大人気なのはザリガニ釣り。もちろん、地域の子どもの自然観察ということで、植物園に許可していただいています。釣ったザリガニは池に返すなどの自然のルールを守って遊びます。



●「季節を感じられるイベント」(城西児童センター)

基本的には、長期休みの時には、子どもたちが好きなことを好きなだけできる貴重な時間。ふるしき市(フリーマーケット)や大きなカルタなど、季節を感じられるような遊びの提案はするけれど、参加するか、しないかを選ぶのは子どもたちに任せています。

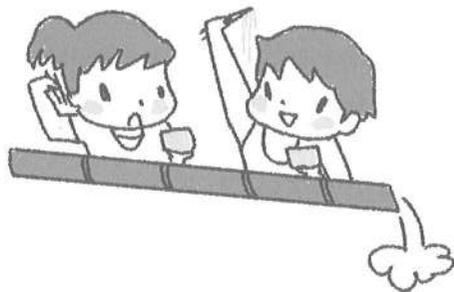
●「仁王マーケット」(仁王児童センター)

児童センター通貨「ベッコ」を作って、子どもたちにお店を運営してもらいました。まずは、店主を募集し銀行(職員)からお店を持つための融資をしました。それを元に店主はそれぞれお店のテーマを決め、問屋(職員)から商品を仕入れ、アルバイトを雇ってお店を運営しました。もちろん、融資した分は収入に関係なく終了後に回収されます。やってみて、赤字が出るのも勉強の一つ。もちろん全部「ベッコ」で支払います。職員はアドバイス程度で、子どもたちで考えて運営し、参加の形も、出店者、アルバイト、客と参加形態が選べるようにした。館内の銀行では児童センター通貨の貯金ができるので、次のイベントをねらって、しっかり貯金している子もいるかも。



●流しそうめん(真滝児童館)

夏休みの人気イベントは、地域の人たちが協力してくれて、本物の竹を割って作る流しそうめん。本格的な流しそうめんに、子どもたちは歓声を上げて大喜び。保護者はもちろん地域の人や学校の先生たちも集まり児童館を取り巻く、地域の大人たちのつながりにも一役買っているようです。



13

遊びが続かない子(ルールを変える、遊びが膨らまない)について

岩手県立大学社会福祉学部 准教授 山本克彦

子どもたちの中には遊びに集中できずに、すぐにあきてしまうなどといった子がいます。私たちおとなは自らの経験から、“遊び”とは、熱中するもので、遊びこむほどに広がりや深まりがあるのだということを知っています。たとえば空き地で野球に夢中になって、日が暮れてボールが見えなくなるまで遊んだとか、心配して家族が迎えに来てくれたとか、そういう経験をお持ちの方もいるでしょう。なぜそんなに集中して遊べたのでしょうか。時間を忘れるほど長く遊びが継続したのはどんな時で、どんな理由があったのでしょうか。

Q 13では、まず「遊びが続くには何が必要か」ということを考えてみましょう。あるいは、そもそも遊びにはどんな要素があるのかということについて問い直すのもいいかもしれません。「遊びと人間」という本を書いたロジェ・カイヨワは“遊び”をアゴーン(競争)、アレア(偶然)、ミミクリー(模倣)、イリンクス(眩暈)の4種類に分類しました。アゴーン(競争)とは勝ったり負けたりという競い合う運動等であり、アレア(偶然)は同じ勝ち負けでもサイコロやジャンケンのように賭け事的なものを意味します。またミミクリー(模倣)は文字通り、ごっこ遊びや人形遊びのようなモノマネ遊びであり、イリンクス(眩暈)はブランコや回転遊具、遊園地の絶叫マシンのようなものを意味します。もちろん世の中のすべての遊びがこのどれかに分類されるというものではありませんが、“遊び”にはこうした“楽しさやおもしろさの要素”があるのだということを知っておく必要があります。この4つの分類はあくまでも一例と考えていただき、みなさん自身の経験から、「遊びにはどのような“楽しさやおもしろさの要素”があるのか」について考えてみてください。そうすることで、子どもたちが遊んでいる場面を見極める力がつくのではないのでしょうか。目の前の子どもが何に集中し、あるいは集中できずに飽きてきているのか…こうした場面を見極めてこそ、そこで援助者として何をすべきかが見えてくるのです。

さて、ここで援助者という言葉を用いました。このテキストをお読みのみなさんは、何らかの形で子どもの遊びに向き合っている“援助者”であると思います。最初から最後まで、子どもに指示を出し、遊びを進行する指導者であるならば、このQ 13は必要でなくなります。遊びが続かない子には「続けなさい」

と指示し、強制的に遊ばせれば解決するからです。“遊びが続かない子に遊びを続けさせる”ことではなく“子ども自らが遊びを続けたいと感じてその遊びが持続すること”について考えるのがそもそもこのQ13なのだと思います。だからここでは援助者という言葉を用いたのです。子どもたちの遊びの場面も含め、集団を援助する技術をグループワークと呼びます。グループワークとは、集団（グループ）を活用した対人援助の専門技術の体系のことであり、単なるグループ活動やグループ単位の作業のことではありません。そこにはグループワーカーと呼ばれる援助者が存在します。子どもの遊びも同じです。援助者は単に安全面等に配慮して遊びを見守る管理人ではありません。遊びというグループワークにおいて、子どもたち個々が成長・変化する姿に気づき、適切な関わりができねばならないのです。

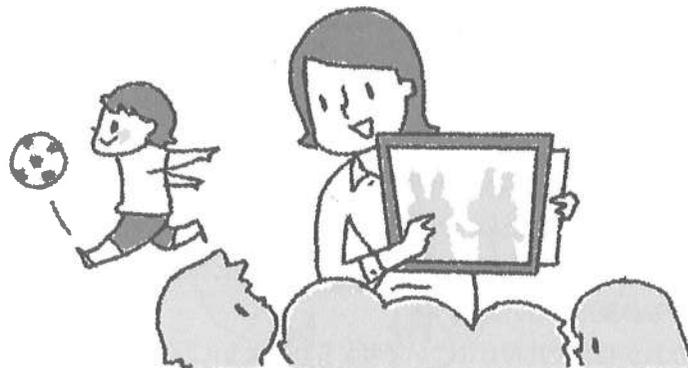
このように述べると何か特別な関わりをしないとダメなように勘違いするかもしれませんが、確かに援助者としてのグループワーカーの関わりは重要ですが、グループワーク（たとえば集団遊び）には子どもたちが遊びを持続する不思議な力が存在します。仲間と同じ目的に向かって取り組む中で感じる一体感や達成感。遊びながら生まれる役割分担やリーダーシップ、時にはグループの分裂・対立、協力という体験。気の合う仲間を見つけて安心したり、自分とは異なる価値観や考えに触れて刺激を受ける等です。こうした目に見えにくい“不思議な力”が働く様子をグループダイナミクス（集団力学）としてとらえることができます。

この不思議な力の活用は、遊びが続かない子に大きな効き目を持つと思います。つまり子どもたちの遊びが持続するには、1対1対応のおもしろさから他者との関わりによるおもしろさへ広げることが1つです。たとえば“おにごっこ”には追いかける、逃げるという競い合いの要素やその時のドキドキ感という心理的な楽しさがあります。ここでの追いかける、逃げるは1対1の場面ですが、これが“てつなぎおに”になると追いかける側のチームワークや、コミュニケーションを必要とする高度な遊びに発展します。野球はピッチャー対バッターの勝負ではなく、チームであることで楽しさが広がるのです。バスケットボールだって、オフェンスとディフェンスのマンツーマンで点を取り合うのではなく、パスを回し、声を掛け合い、フォーメーションを組む等するからおもしろさが広がるのです。

運動量の少ない“紙飛行機”遊びも、一見一人遊びのように思えますが、飛

距離や滞空時間を仲間と競うとか、よりよく飛ぶ折り方を工夫して教えあうというおもしろさがあるはずですが、あるいは飛んで行った飛行機を追いかけてたり、拾いに行ってもまたスタート地点に戻るといった行き来そのものが競争になったり、単純に楽しかったりもします。

子どもの遊びの場面を見極めること、そこに子ども自らが興味関心を示して遊びを持続するような要素を見出すこと、それらを子どもたちどうしの相互の関係を活用しながら広げてみる。さあ、まずは意識して子どもの遊びの場面に寄り添ってみてください。



後片付けをやらずに帰る子どもへの対応はどうしていますか？

児童館や放課後児童クラブから子どもたちが帰る時間は、家庭の状況等によって、それぞれに違います。

特に、友達と何人かで遊んでいる途中で、1人、2人と抜けて帰ってしまう子どもたちにどんな風に声をかけたらいいのか悩んでいる方が多いようです。まさか、1人帰るたびに全員で片付けるなんてこともできません。

遅い時間まで児童館や放課後児童クラブで過ごす子どもさん、つまり、最後まで遊んで片付けをしなければならぬ子どもさんがいつも同じになってしまうことも気になっているようです。

「後片付け」や「掃除」、「整理整頓」などは、それぞれの違いを子どもたちが自分たちで考えて、工夫して出来るようになることが大きな目標なのかもしれませんが、いきなりそうはならないので、できそうなところから始める、今できていることを定着させるということからスタートするのが良さそうです。

特に、低学年のうちは、自分の片付けられる範囲をあらかじめ想定して遊ぶということは難しいです。そのため、大きいお子さんやスタッフが片づけるのを手伝いながら、片付け方や、自分の片付けられる範囲で遊ぶということを学ばせることから始めることも必要だと思います。

子どもたちが自分で片付けについて考えられるように、こんな工夫をしている児童館がありました。

何人かのお友達で遊んでいて、途中で帰る子がいたら、職員はその子に「どうするか相談してみて」と声をかけて(玄関で会ったら片付け相談した?と確認)、残る子(たち)が「まだ遊ぶからいいよ」と言ってくれたら「ありがとう」といって帰る、「じゃあ、自分たちもおしまいにする」といわれたら、一緒に片付けてから帰る。まずは、声をかけて帰ることを習慣づけさせる。ちょっと話はそれますが、児童館に来たとき、帰るとき、挨拶をしない子どもや親御さんがまだまだ多いみたいです。挨拶をしない親御さんは、付き合ってみると、ごく普通の親御さんだったので、不思議に思い、児童厚生員がよく見ていると、児童館自体が「出入りするときに挨拶する場所」と思われていない、自由に来て、黙って帰って構わない、例えるなら公園のようなところだと思われていることに気が付きました。そこで、スタッフが意図

的に出迎えたり、見送ったりして、声をかけていると「そういう場所なんだ」と気付いて挨拶してくれる人が増えた、という話もありました。そういう意味でも、とりあえず習慣化するように声をかけることが第一歩のようです。

また、大人ではなく、一緒に遊んだ友達に聞くことで、自分が片付けずに帰ったら、その分を片付けてくれている友達がいることに気付くチャンスになります。すると、子どもが、対人場面での想像力や自分の行動に見通しもつ力を育む上でも大切なことだと思います。

前述の行事のなかで、児童館通貨を作ったところでは、期間限定で、片付けや掃除を手伝うなどによって、通貨をもらえるとしたところ、通貨が無くなってからも、自発的に手伝いや片付けをしてくれる子どもが増えたと話しています。例えば、誉められたり、やればできると自分を見直したり、自分の役割だと誇りをもてことが原動力になって、ちょっと面倒だなと思うことにも、目に見える見返りがなくなっても、自発的に取り組むことができるようです。



子どもさんの支援に困った時、誰か(どこか)相談できるところはありますか?それは誰(どこ)ですか?

このQ & Aをまとめてみたところ、児童館・放課後児童クラブのみなさんをはじめ、子育て・子育て支援に関わる大人は、直接子どもと関わるだけでなく、親、地域、学校など、幅広く子どもを取り巻く環境をつなぐ役割を求められているのだということを、改めて感じさせられました。子どもたちと過ごす現場では、このQ & Aで取り上げた以上に沢山の色々な出来事に出会い、たくさんの悩みを抱えているのではないかと思います。

子どもたちとかかわるなかで、解決が難しいような問題にぶつかった時はどうしていますか?

児童館・放課後児童クラブの現場で質問してみたところ、「職員同士で話し合って解決する」という答えがほとんどでした。中には、「運営委員や市町村の担当者に相談する」というように、関係機関に相談しているところもありました。

例えば、発達障がいを持つお子さんの支援や児童虐待の問題などの対応が難しそうだと思う問題にぶつかったとき、情報や対応のアドバイスが欲しいときには、相談支援機関を利用することで、何かしらの糸口が見えるかもしれません。子どもたちの抱える問題が、多様化、深刻化しているといわれるなか、子どもを支援する大人が、自分の力量を超えるような問題を1人で抱え込んでしまうのは、子どもたちにも支援者にもいい影響があるとは思えません。子どもたちの大変さを少しでもやわらげるように、どこに相談するか、誰に動いてもらうのかということ判断する力が、スタッフに求められていると思います。そんな時に思い出してもらえたらと、巻末に子育て・子育てに関連する各種相談機関を記載しました。相談を受けた時に、相手に相談できる場所を伝えたいときにも参考にしてみてください。

専門機関を利用する場合は、出来る範囲で構いませんが、次のことを整理して相談することをお勧めします。

- ①相談したいポイントを具体的に絞る(相談機関に期待することを明確に)。
 - ②困っている人は誰なのかをはっきりさせる。
 - ③問題を時系列で整理しメモしておく。
 - ④子ども本人、保護者の同意の有無。
- ※出来ればとっておく、出来なければ、個人が特定されない範囲で、あくまでもスタッフ自身の問題として相談する。

子育て・子育て支援に携わる大人が、いろいろな課題や問題について話し合える仲間がいたり、スタッフ同士が力を合わせて解決できるということはとても素晴らしいと思います。



あそび ma・senka 代表 西里真澄

その日は、児童館にて「ふれあい交流事業」が開催されるという事で会場に向かいました。この事業は、普段児童館を利用している小学生と募集に応じて参加した高校生が、児童館の先生の力をかりながら、自分たちで遊びの企画や準備をして、広場を利用する乳幼児の親子と交流するという事業です。私の役目は、子どもたちが乳幼児の親子と関わるにあたって留意する点を講義するという事で、赤ちゃんのお人形を持参したのですが、準備の間に近寄ってきた小学生の男の子たちが、お人形の目をついたり、足を持って逆さづりにしたり、放り投げたりが始まりました。先生方の「お人形でもやさしくしなければだめよ!」という言葉に、更にふざける「やんちゃ坊主」達。

こんな様子を、明日からいらっしゃるお母さんが目にしたら……と悲しくなると共に、不安に思いながら講座をはじめました。

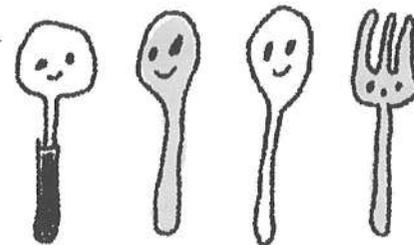
「おばちゃんは助産師です。みんなが生まれた時、一番初めにあった人は助産師だと思うけど」「みんなも赤ちゃんの頃、大事に大事にお世話をされたのを覚えていますか?」「おなかの中にいた時にお母さんから優しく話しかけられたのを覚えていますか?」と話し始めた途端、ざわついていた会場がし～んとなりました。真剣な表情の高校生。ぎっちり膝を抱えて座りじっと目を見張っている小さな女の子。少し不安そうに、近くの高校生にくっついている子、照れくさそうにもじもじしている男の子。彼らが安全にかつ不要に恐がることなく赤ちゃんに関わるように「赤ちゃんの目は……」「赤ちゃんの体は……」「こんな風にしたら喜んでくれるよ」と生理的な特徴やお世話の仕方を話していきました。お人形で抱っここの練習になると、誰よりも大事に愛おしそうに抱っこしている、やんちゃ坊主たち。照れくさそうにしている子も高校生に促されて、会場中が兄弟の様に笑顔を交わしている姿に「明日からも大丈夫」と安心して帰途につきました。大人がきちんと関われば、子どもだってちゃんとわかる。「大事なことは何か」子どもたちと向き合えた幸せに感謝です。



「つながれいのち」ワークショップ(2007年3月いわて子どもの森)

※「あそび ma・senka」は

いつも元気印で「親子の笑顔」に関わる仕事をしているメンバーが、それぞれの得意とする事を持ち寄り、「あそび」を中心に親子のコミュニケーションが豊かで楽しくなることを応援する共に、子そだて環境がより豊かなものになることをめざし、2006年に活動を開始したサークルです。「親子のあそびを応援する活動」はもちろん「お父さんの応援～プロジェクト titi-das～」や「いのちのはじまりに触れ、互いに感謝し慈しむ心を育てる活動」など、活動にも広がりが出てきましたが、いつも「家族」「親子」の笑顔の側で活動出来る事に幸せを感じています「もっと豊かに♪」「もっと楽しく!」今日も笑顔であそび ma・senka ♪



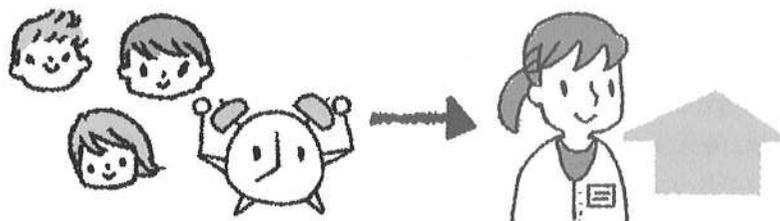
V. 今、職員に求められること



1) 心とからだの防波堤に

子どもの森ではこの4年間、冬場に県内各地に出向いて、子どもに関わる児童館、放課後児童クラブ、子育て支援センター、保育園などの現場で働くみなさんと本音で語り合う「情報交換会」を開催してきました。話を聞か中で私が常に感じたのは、「子どもたちの圧倒的な多忙さ」です。今に始まったことではないと言われるかもしれませんが、子どもを取り巻く忙しさは減るどころかますます増え、中には、生活の場である放課後児童クラブでさえ、スポーツ少年団やお稽古ごと、塾、スイミング教室など、子どもが他の場所へ行く中継地点でしかないといった状況も生まれているようです。土日もスポーツ少年団で遠征試合で、月曜日は疲れ果てて児童館、放課後児童クラブにやって来る子どももいたり…。大人の思惑で子どもたちをこれ以上忙しくさせる方向へ追い込んではいけなないと私は思います。

今の時代、子どもには3つの間、時間・空間・仲間がないということがよく言われていますね。ではどうすればいいかを答えてくれるひとはいません。私たちは、児童館、放課後児童クラブがその3つの間を担う場所のひとつとして、子どもたちの心とからだの防波堤になり得ることを、身を張りながら、実践で示さなければなりません。もちろん、私たち職員は全能ではないので、独りで課題を抱え込んで疲れ果てないための工夫も必要です。職員同士でのサポートが第一義的なことではありますが、学校や専門機関などとの相互に相談できる関係を継続しておくことも、欠かせないポイントです。いずれにせよ、子どもに関わる私たちの自己肯定感（セルフエスティーム）が下がらないように、館長や施設責任者はよく個々の職員の状態をよく見て、気を注ぎ続ける努力を怠ってはならないのです。



時間・空間・仲間

担う場所=児童館

2) 見守ること、見張ることの違い

以前、A県で開催した民生児童委員研修の中のひとコマ。グループワークの中からこのような出来事が浮かび上がってきました。委員さんたちが小学校の見守り隊として放課後の横断歩道に立った時のこと。使命感に燃えて横断歩道脇で、帰りの子

どもたちに声がけをしたところ、子どもたち全員は何も答えず、顔を背けるように去っていったのだそうです。ショックを受けた委員さんは翌日学校に事情を話しに行ったところ、先生いわく、それは学校で見知らぬひとから声をかけられても返事をしないことと約束させているからだったことが分かりました。だから学校が悪いとか、犯人探しをする必要はないのですが、ここで私が考えてみたいのは、どういう時に子どもたちは見守られていると感じ、見張られていると感じるだろうかということです。

見守られていると感じるのは、まず、その委員さんの顔を知っている、見たことがあるからだと思うのです。それから、もうひとつは、自分を評価しようとしてはいないと感じるからだと思うのです。評価しようとはしていないというのは説明が難しいのですが、同じ目線で、見てくれているというような感じですね。逆に、見張られると感じるのは、単純にその委員さんを知らないからかもしれません。評価されていると感じるのは、一段上のところから何か一方的な関係の中で断定を受けるといったような感じではないでしょうか。この場合、子どもに聞いたわけではないので実際のところはよくわかりませんが、自分が見守っているつもりでいても、無意識のうちに見張っている、もしくは見張っているように子どもたちには感じられていることがないかどうかということに、私たち児童館職員は自覚的になる必要があるということです。（子どもの森で10則を作ったのはそのためでした）

3) 子どもの話を聞くことの大切さ

子どもの本音はどこで出るのでしょか。遊びと遊びの間のちょっとした休み時間に、何気なくぼつりと漏らしたひと言だったりすることがあるのではないでしょか。本人も無意識なまま、不安な気持ちや苦しい気持ちを訴えていることがあります。こうした子どもからの訴えを聴き取ること、子どもの抱える課題を発見することもまた、児童館の大切な役割なのだと思います。実は、子どもが自主的、自発的に、本音を出して、自らが相談できる場所は地域の中にはあまりないというのが実情です。子どもの話を聞くことは、子どもと同じ目線に立ち、子どもから信頼され、あてにされる存在として日頃からの信頼関係が成立している児童館だからこそできることなのです。これからの児童館の存在意義は、独自の子どもに関わる相談機能を持てるかどうか（保護者もそうですが）にあるのではないかと私は考えています。

館の継続的な発展を図るためには、私たちのサービスの質を向上させるための日々の改善をひとつひとつ丁寧にやって行くしか方法はありません。一見地味ですが、こだわりを持ってやれば必ず成果は出せると私は確信しています。みなさんはどう考えますか？

（吉成信夫）



VI 困ったときの連絡先リスト



<子育て・子育てに係る全般>

- 市町村保健センター (各町村にお問い合わせください)
- 市家庭児童相談室 (各市にお問い合わせください)
- 岩手県福祉総合相談センター
電話：019-629-9600 (代表)
※福祉総合相談センターでは、児童虐待などの緊急通報や相談を毎日 24 時間受け付けています (24 時間相談電話：019-629-9608)
- 子ども家庭テレフォン (虐待 110 番子ども家庭)
電話：019-652-4152 (年末年始をのぞく 9 時～22 時まで利用可能)
FAX：019-629-9612
- 岩手県宮古児童相談所
電話：0193-62-4059 FAX：0193-62-4054
- 岩手県一関児童相談所
電話：0191-21-0560 FAX：0191-21-0561
- 家庭養育支援事業 電話相談 (和光学園)
電話：019-647-2143 年中無休 9 時～22 時
- 子育て相談 (すこやかダイヤル) 岩手県生涯学習センター
電話：0198-27-2134 月～金曜日の 10 時～17 時 (相談員対応)
- 子育てメール相談 (子育ていわてポータルサイト) 岩手県立生涯学習推進センター
<http://www.manabi/pref.iwate.jp/kt-shien/>
携帯メール、パソコンメールから「いつでも」「気軽に」相談することができます。

<発達障がい関連>

- 岩手県発達障害者支援センター
電話：019-601-2115 (月～金曜日の 9～12 時、13～16 時)
- 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター子ども相談室
岩手県盛岡市上田 3-18-33 電話：019-621-6634
- 障がい児相談 (のびっこ療育センター)
電話：019-663-2013 24 時間いつでも可能

- 発達に関する教育相談 (コスモダイヤル) 岩手県立総合教育センター
幼児・小学生・中学生・高校生、盲・聾・養護学校に通う児童生徒、保護者や家族、保育者、学校関係者や教育機関からの相談を受け付けています。
電話：0198-27-2473
- 「なすなの会」岩手 LD 児・者を守る親の会
TEL / FAX 019-637-9543
- 「わっこの会」いわて ADHD を考える会
岩大附属教育実践総合センター内 電話：019-621-6634
- 「エブリの会」いわて高機能広汎性発達障害児・者を考える会
岩大附属教育実践総合センター内 電話：019-621-6634
- 岩手県自閉症協会
電話：0191-21-3480

<学齢期からの相談>

- ふれあい電話 (岩手県教育委員会)

総合教育センター 0198-27-2331 平日 9:00～17:00

※各教育事務所でも受付

盛岡 019-629-6742	花巻 0198-22-4981	北上 0197-65-2739
奥州 0197-22-2891	一関 0191-26-1419	大船渡 0192-27-9910
釜石 0193-25-2727	宮古 0193-64-2222	久慈 0194-53-4991
二戸 0195-23-9210		

- 思春期ホットライン

※県内各保健所

盛岡保健所 019-653-7787	花巻保健所 0198-22-7855
北上保健所 0197-61-3333	水沢保健所 0197-51-7173
一関保健所 0191-32-4107	大船渡保健所 0192-27-0761
釜石保健所 0193-21-2355	宮古保健所 0193-65-1160
久慈保健所 0194-61-1131	二戸保健所 0195-22-3230

※相談時間は、月曜日～金曜日 (祝祭日を除く) 9:00～17:00 です。
保健師が相談に応じます。FAX での相談、質問も受け付けます。

●親と子、教職員のためのもしもし教育相談

電話：0120-895-114

開室日時 木曜 13時～17時 金曜 15時～19時 土曜 10時～15時

●青少年なんでも相談室（青少年活動交流センター）

電話：019-606-1722

火曜・水曜・金曜・土曜・日曜日 9時～16時

月曜・木曜日 9時～20時

※年末年始・施設点検日は除く

●ポランの広場（NPO 岩手県青少年自立支援センター）

電話：019-605-8632 火・金・土 10:00～16:00（祝日を除く）

※不登校、引きこもり等に関すること

<その他専門相談>

●岩手県障害者 110 番相談室（県手をつなぐ育成会）

電話：019-639-6533 月～水・金 10:00～15:00（第3金曜日、祝祭日を除く）

木曜日 15:00～20:00、第3土曜日 10:00～15:00

●人権相談 盛岡地方方法務局

電話：019-624-9859 ※親子、家族など日常生活全般の人権にかかわる相談

●子どもの人権 110 番 盛岡地方方法務局

電話 0120-007-110 ※いじめや体罰、虐待など、子どもからの相談

●岩手県療育センター 盛岡市手代森6-10-6

電話：019-624-5141（代表）

※外来診療、肢体不自由児入所、通園、短期入所、重症心身障害児（者）通園

●いじめ相談電話（岩手県教育委員会）

電話：019-623-7830

●児童虐待対応専門チーム（福祉総合相談センター内）

電話：019-629-9605

●こども救急相談電話（岩手県医師会）

電話：019-605-9000 または #8000（PHS、ダイヤル回線からは利用不可）

年中無休 19時～23時 看護師が対応します

●ヤングテレホンコーナー（県警察本部少年課）

電話 019-651-7867（県南地域は 0197-65-2400）

月～金 9:00～17:45（土日・祝祭日留守電・メール 24 時間）

※少年の悩みごと、少年非行、少年犯罪被害

●「青少年の自立を支える会」

FAX 019-637-9543

※発達障がい及びその傾向をもつ青少年（思春期）や親への支援をしています。

●外国人のための相談窓口

在住外国人が抱える課題・問題などを支援するため、在留資格などの諸手続きや、医療・福祉・子育てなど様々な困りごとに対して情報提供や専門機関の紹介などに 対応いたします。

対応言語 英語・中国語

電話：019-654-8900 FAX：019-654-8922

月曜日～日曜日（12月29日～1月3日を除く） 9:00～21:30

財団法人 岩手県国際交流協会（場所：アイーナ 5F 国際交流センター）

<なやみ相談>

●盛岡いのちの電話

電話：019-654-7575 月曜～土曜日 12時～21時、日曜 12時～18時

●こころの電話（岩手県精神保健福祉センター）

電話：019-622-6955 月曜～金曜日 9時～16時 30分

※祝祭日・年末年始はお休みです





いわての児童館テキストは、現場のスタッフからの「学びたい気持ちはあっても、研修に行くことが難しい」という声を受け、県内の児童館を間接的にサポートする方策として、平成18年にvol.1「児童館ってどんなところ？健全育成ってなあに？」を発行しました。翌年には、児童館テキストvol.2を発行し、児童厚生員の研修会などでも、情報が欲しいというニーズが非常に高かった、軽度発達障がいへの理解と対応をテーマとして取り上げました。児童館・放課後児童クラブ等職員だけでなく、子育て中の親御さんなど、子育て・子育てに関わる沢山の皆さんに活用していただくことが出来ました。

このたび、3冊目となる、いわての児童館テキストvol.3「子育て・子育て支援Q & A」をお届けいたします。これまでいわて子どもの森が行ってきた、地域ふれあい事業や児童館・放課後児童クラブ等交流大会等を通して見えてきた、子育て・子育て支援現場の悩み、迷い、不安などについて色々な角度から考える機会になればとの思いから、作成したものです。

いわて児童館テキストの作成にあたりましては、沢山の皆様にご支援、ご協力を頂きました。監修をいただきました(財)児童健全育成推進財団企画調査室長の野中賢治さんには、児童館での実践経験をもとにテキスト全体を貫くテーマをしっかりと示して頂きました。また、Q & Aの執筆をいただきました、カナンの園ヒソップ工房施設長佐藤真名さん、岩手県立大学社会福祉学部准教授山本克彦さん、奥州市水沢青少年健全育成推進会議主任事務局員大村千恵さん、盛岡・マニラ育英会代表理事村田知己さん、あそびma・senka代表西里真澄さんには、子どもと関わる姿勢について、貴重な示唆を頂くことができ、より深い内容のテキストになりました。取材協力を頂きました、城西児童センター、仁王児童センター、矢巾東児童館、江刺児童センター、真滝児童館、湯本学童クラブの皆さんには、現場から貴重なご意見を発信していただきました。皆様のご支援、ご協力のもと、無事に発行することができましたことを、改めて感謝申し上げます。

『いわて児童館テキスト』は、今後も毎年1巻ずつ、テーマを変えて発行を続けていく予定です。

子ども達を中心に据えて、子ども達の発達という縦の視点を大切に、子どもたちと向き合っていくために、今後とも児童館、放課後児童クラブをはじめとした、子育て・子育て支援の現場で働くスタッフのみなさまのニーズに応えられるように情報を発信していくと共に、みなさまの元気の素となれるような児童館テキストを作成していきたいと思っております。

岩手県立児童館 いわて子どもの森
(佐々木志帆子)

〈岩手県立児童館 いわて子どもの森〉

豊かな自然環境の残る奥中山高原西岳山麓に全国で22番目の大型児童館として平成15年5月5日にオープン。「おとな子どもも、のんびり、ゆっくり、ぼけーっとしようよ」を基本コンセプトとして、子どもたちの心とからだのびのびと解き放たれる環境づくりを第一に、五感を通して楽しみながらの遊びとまなびの体験ができるようソフト主体による館運営の考え方を開館当初より一貫して取り入れているほか、県内全域の児童館、放課後児童クラブ等職員の研修、子育て・子育てネットワークづくりにも精力的に取り組んでいる。

所在地：岩手県二戸郡一戸町奥中山字西田子1468-2
TEL：0195-35-3888 FAX：0195-35-3889

<http://www.iwatekodomonomori.jp/>

開館時間：午前9時～午後5時(季節により変動あり)

休館日：火曜日、祝日の翌日(いずれも平日の場合)、12/29～1/1

他に年4回の整備休館、冬期月曜に臨時休館あり。

付属設備：まんてんハウス(自炊宿泊施設)、キャンプ場

入館料：無料

